



# 私、未婚の母 なんです

この世に  
生を受けることの  
できなかつた子供たち  
を含めた  
5人の出産とか

ストーリーだった  
やつのこと・・・

橘 夢

子供たちの父親は一人、みな同一人物

どんなやつかって・・・

もと会社の上司

上司だったってしょうもないやつ

家庭を持っていたくせに

やつはストーカーになった

## 目次

---

1. ストーカー
2. 若さゆえの誤算
3. 私の立場って？
4. 私の未婚の母人生が始まった
5. 進行流産
6. 初めての麻酔体験
7. Xデー
8. この子はどうしても産みたい
9. 人生で一番？と思えるほどの喜び
10. 母はつよし
11. 転職
12. 何も知らない
13. 夢の出産
14. 海との生活
15. やつとの将来？
16. 女の子出産計画
17. 同居している他人
18. 結婚って何？
19. Sという女
20. 怯える日々
21. 厳しい生活
22. 運転手のアルバイト
23. 再び
24. 空とのお別れ
25. 塊が
26. しかたがないこと？
27. 異常な形状のお腹
28. 葛藤
29. 無念
30. 悲しい記憶
31. 八方塞がり
32. Mという女
33. 希望
34. Aさん
35. 仲人

36. 女性からの電話
37. 女の勤
38. ゼロの幸せ
39. パパとの別れ
40. 母子家庭
41. 信じられない申告
42. Aさんから聞かされた真実
43. 余命半年の人

## ストーカー

---

やつは、私と同じチームで仕事をしていた上司だった。  
けれど私が別の部署に異動になった。  
その頃からやつのストーカーが始まってしまったのだ。

もちろん当時は「ストーカー」なんて言葉はなかった。  
携帯もない。  
だから行動あるのみだった。

同じチームにいた頃のやつは、日ごろから結構な遅刻魔だった。  
出勤してくるのはいつも就業時間のぎりぎりか、間に合わないことさえ多かった。  
それなのに、私が別の部署になってからは毎朝、自分の家から1時間半もかかる私の家の最寄りの駅まで、私の通勤時間前にやって来ては、私が来るのを待ち伏せていた。  
そして私の乗る満員電車の同じ車両に乗り込んで来たのだ。

帰りの時間も、いつのまにか私の自転車置き場と自転車を覚えていて、私より早く来てはそこでじっと待っていた。  
暗闇で隠れるようにしてひそかに待っていて、急に私の目の前に現れるので、ものすごく怖かった。  
毎日毎日、その行動力といったらすごいものだった。

そんな中で私は、いかにしてやつを撒くか、が日課になった。  
家を出る時間を変え、駅まで自転車を使わずに歩いて行ったり、ホームで乗る場所を変えたりして・・・。  
ドキドキしながら駅まで行き、ホームからやつに遭遇せずに電車に乗った。  
電車が走り出した時、私が乗っているとは気付かずに、ホームのベンチに座って待っているやつをドア越しに発見した時は、車内で「やった！！」と思わず笑みがこぼれた。

うまく撒くことに成功していて、何日か会わず通勤することができた。  
ところが（今日も見つかることなく電車に乗れた）と思っていた、のもつかの間、どこで見つかったのか、いつの間に気づかれたのか、2つくらい先の駅付近でなんと隣の車両から移ってきて、突然目の前に現れた。  
ショックと同時に、その行動力たるや、ものすごい執念だと思った。

挙句の果てに、やつはとうとう私の家の近くにアパートを借りて、引っ越して来てしまった。

すると今度は家の周りをもチョロチョロし始めた。

たとえ通勤時間に会わずに済んでも、会社から帰宅した後毎日家の近所にやって来ては、窓のある側の裏の通りから2階の私の部屋をずっと見あげていた。

カーテン越しにそっと覗くと、暗闇の中にこちら側を向いて微動だにしないやつのシルエットがあった。

怖かったので、帰宅したことを知られないよう、部屋にいることを悟られないように、2階は廊下も自分の部屋も、電気はつけずに真っ暗のまま過ごしていた。

家の電話も毎日毎日鳴った。

「会いたい。会いたい」と、時に泣きながらかけてきた。

そんなやつを、電話越しに諭しなだめていた私の口調から、母は（この男は年下かな？）と思っていたらしい。

そしてとうとう無理やり、やつの部屋の合鍵を渡されてしまった。

## 若さゆえの誤算

---

やつのいるチームに転勤してきた私にとって、確かにやつは気になる存在ではあった。清潔感があって、こ洒落た感じの雰囲気が出て、上司の中でも一番印象がよかった。長身ではないけれど中肉中背で、男性としてはどちらかというと華奢な体格のやつは、見た感じはスマートだった。

人当たりがいいのか、お昼休みなどに、新入社員の女の子などがやつの周りを囲っている様子もしばしば見かけた。

転勤してきたばかりで何も知らなかった私には、部下の女子と少し照れくさそうに、ハニカミながら子供の話などをしているやつは、穏やかでやさしそうな人（きっと奥さんがステキな人で幸せな家庭なんだろう）な感じに映って見えていた。

そもそも私は、小さな子供のいる家庭を持った30代中頃の男性に、とっても幸せそう、というイメージを持っていた。

つまり、家庭を持った少し上の年代の人たちは幸せに満ちている、だからそんな人たちからしたら、私のような独身女性などは恋愛対象になるはずがない。

要するにそんな人たちは、ちょっと遊んでも問題ない、安全パイだと思い込んでいた。

というのも、当時の私は婚約解消をしたばかりで、しばらく恋愛などしたくないという気持ちで憔悴していたので、そんな対象になる自分と同じ20代の男性に近寄るのが怖かったのだ。

そんな安易な考えから、家庭人であるちょっと年上の上司に誘われれば、ホイホイとついて行って御馳走してもらい、暇つぶしを楽しんでいた。

ところが、それが大きな勘違いだった。

今にして思えばその年代、結婚して10年くらいというのは、倦怠期なのか、一番浮気をしたい年代だったのではないか？

他支店から転勤して来たばかりの私の存在は、珍しかったのか、そんなやつと同年代の男たちが、次々と誘ってきた。

なかでも一番積極的だったのがやつだったのだ。

まんまとカモになってしまったようだ。

私は、やつと同じチームに転勤して来てから間もなく、部内の他のチームに異動になった。

毎日顔を合わせていたのに、見えないところに移ったことでやつの行動がエスカレートしていったのだろうか。

社内でも、無理やり用を作っては、私のいるチームに一日に何度もやって来た。

でも私は、不倫なんてするつもりは全くなかったし、そんな幸せそうなイメージの家庭を壊すなんて行為は絶対にしたくなかったから「そんなことしないで、ちゃんと奥さんの元に帰って下さい。」と言って、何度も必死にやつを説得していた。



## 私の立場って？

---

私も一生懸命だった。

どうにかしてやつに、元の平和な家庭生活に戻ってほしいと思っていた。

けれど、元々嫌いだったわけではないし、ストーカー行為から撒いては喜んでいることを「ちょっとかわいそうだったかな・・・」と、後悔してしまうようなこともあった。

ある朝、相変わらず追いかけてきて同じ車両に乗り込み、私の目の前に立ったやつを見た時、さすがにうんざりして、思わず「いい加減にして下さい！！」と声を出してしまった。

静かな車内だったので、たぶん私の声は車中に広く響き渡ったと思う。

私には、周りの目が気になるどころではなく、忌まわしいやつの姿しか映っていなかった。

やつは驚いた顔をしていたが、だんだんと真っ赤に顔色が変わっていった。

その時ちょうど駅に着いたので、やつは何も言わずに振り返り、いたたまれないようにそのままひとり電車を降りて行った。

私は、茫然とその後姿を見ていた・・・ら、なんだか急に涙が出てきた。

何をされたわけでもない。

ただ常に目の前に現れる、その存在を否定したかっただけなのに・・・

ふと我に返ると、ほっとするどころか、嫌な気持ちになっていた。

人前であんな恥をかかせて・・・なんということをしてしまったのか・・・。

自分のしたことに罪悪感だけが残り、とても気分が悪くなった。

それからしばらくは、ひどい自己嫌悪に落ちてしまった。

引っ越してきたやつは、完全に一人暮らしをしていた。

22歳で早々に結婚し、30代で一戸建の家を持ち、順風満帆に生きてきたやつにとっては

こんな何もかも一人でやらなければいけない生活なんて人生初なんじゃないのか？・・・今更なんでそんな・・・食事とかどうしているのだろう・・・。

いつしか、なんだか気になってしかたなくなっていた。

ある雨の日のこと、たまたま車で、やつのアパート前を通りかかった。

すると、窓越しに洗濯物が出しっぱなしになっていて、雨ざらしになっているのを見てしまった。

（自分で洗濯もしているんだ）と思ったと同時に、とっても哀れに思えてきた。

そして（私、鍵持ってるんだ・・・）と思った。

ただ洗濯物を入れるだけのつもりだった。

ドアを開けると、すぐ目の前のキッチンでやつが洗い物をしていた。

いきなり入ってきた私を見て、やつはとても驚いて、そしてものすごくうれしそうな顔をした。当然私も驚いた。

いないと思ったからこそおせっかいに（洗濯物を入れてあげよう）なんて・・・。

それから帰れなくなった。

やつにしてみれば、間違いだろうがなんだろうが、理由なんてどうでもよかった。

私は部屋に入ってしまったのだから。

無理に帰ろうとしたら大変なことになった。

力づくで止められた。

監禁状態だった。

体中があざだらけになっていた。

あざの数を数えて過ごした。

全身13ヶ所にあった。

やつは「家庭は、もうとっくに壊れている」「離婚届にも、お互いに判を押してある」そんなことを言っていた。

そこに何日かいた気がする。

## 私の未婚の母人生が始まった

---

信じるしかないのか・・・いや・・・こんなことは・・・。

否定しつつも、なんだかわからないまま、やつとのいわば『不倫』が始まった。

部署が変わっても、お互い同じ会社にいるということは変わりなかった。

何かにつけて顔を合わすし、やつは相変わらず、いつも待っていた。

やつの本家の状態がどうなっているのか？・・・気になっているからついそんな話をする。

決まって喧嘩になった。

喧嘩している時の方が多くはないかという状態だった。

でも、自分でもどうしたらいいのか、どうしたいのか、わからなかった。

初夏のとある連休に、やつと二人で旅行に出かけた。

しばらくして、なんとなく・・・。

(あの時だ・・・たぶん・・・)と、そんな予感があった。

そして秋にまた、私の車で私の運転で、やつと飛騨高山まで旅行した。

目にした雄大な景色に、私はひそかに「陸」と名付けていた。

私は子供の頃から乗り物酔いが激しく、バス遠足などは必ずビニール袋を持参していた。

だから、考えただけでも気分が悪くなるほど、車に乗るのは憂鬱なことで、大嫌いだった。

けれど会社の運転手さんの「自分で運転すると酔わないよ。僕も運転してないと車酔いするんだよ」という目からうろこの話を聞き、それがきっかけで私は運転免許を取った。

事実私自身も、自分で運転しているとうそのようにまるで車酔いしなかったので、いつしか運転することは、大好きになっていた。

だから旅行中もずっと、当り前に私が運転をしていた。

高速道路も、山道のヘアピンカーブも、迷わず自分で運転した。

カーブ連続の山道は多少渋滞気味に、車が前にも後ろにも、均等に間隔を開けて進んでいた。

マニュアル車でアクセル、ブレーキの繰り返しをギアで調節しながら走っていた。

その緊張感はどうとう身体に負担をかけていたに違いなかった。

そして、その頃の私は結構な飛ばし屋だったので、空いている長い高速道路は、一台でも抜かし

て前へ前へと、速く走る事ばかり考えていたので、小さい車で行きも帰りも130キロ程のスピードを保ちながらずっと走り続けていた。

当然身体は、長時間ずっと微振動を受け続けていた。

## 進行流産

---

出血に気づいたのは、無事に家まで帰り着き一息ついた時だった。

下着に赤茶色く色が付いているのを見た時は、はっとした。

そして同時に、自分の置かれた状況からいろいろな思いが頭をよぎった。

妊娠・・・流産・・・親・・・未婚・・・会社・・・

けれど、その日は日曜日だったので（明日の朝病院へ行こう・・・）そう思い、とりあえずその日はそのまま就寝した。

次の日、初めて産婦人科を受診した。

先生には案の定、妊娠していることを確信させられ、さらには「あずき色の出血がありますから入院した方がいいですよ」と言われてしまった。

思いがけない「入院」という言葉に戸惑った。

私は独身のOLだった。

会社には「具合が悪いので病院に寄ってから出勤します」とだけ連絡してあったので、このまま入院なんて・・・と、突然のことに困惑した。

どうしてもこのまま入院することには、心の準備ができていないでいた。

やはり「今から入院はできないんですけど・・・」とお願いした。

先生には、とりあえず『絶対安静』を約束させられ、出血止めと子宮口が開かないようにする薬、というものを処方してもらって、そのまま帰宅してきた。

仕事も休暇に変更してもらい、その日は自宅ですっと横になって過ごした。

先生には特に言わなかったが、生理痛のような腹痛がずっとあった。

絶対安静と言われても、必ずしもベッドで横になっていなければいけないこともないだろうと、私は、家族は全員不在のリビングでテレビを見たりして過ごしていた。

そして、夜になって家族が帰宅しても、平静を装い、夕食後もリビングのソファで軽く横になっていた。

でもやはり、生理初日のような腹痛が治まらないことが少し気になったので、早めに自分の部屋で寝ることにした。

起き上がって洗面所に移動し、歯磨きを始めたその時、何か・・・今までに感じたことのないほどの大きさの、塊のようなものが『ずるっ』っと、身体から出てきたのを感じた。

慌ててトイレに行って下着の中のナプキンを確認した。

・・・絶句だった。

そこに載っていたのは、親指くらいの大きさの、白っぽい、お魚のような……。初めて見る姿形に、身体が震え、言葉が出ない代わりに涙が溢れてきた……。

それから私は、自分の部屋にこもり、ただ独り、声を出さずに号泣していた。両手の中にしっかり、ずっと陸を抱きしめたまま、何時間経ったかもわからないでいた。

## 初めての麻酔体験

---

気づいてみればもう、家族も全員寝静まった真夜中だった。

暖かかった陸も、すでに、すっかり冷たくなっていた。

何とかしなければ・・・と思った。

気を取り直した私には、やはり頼る人はやつしかいなかった。

陸を、小物入れに使っていた小さな缶の中に納め、ただそれだけを持って、取るものもとりあえず、やつの住むアパートまで車を走らせた。

陸を見せて、やつにことの始終を話すと「病院へ行こう」と促された。

そして私は、真夜中の救急病院へ行き、そのまま入院することになった。

入院の手続きは、なんとかやつがやってくれた。

必要な物もやつがそろえてくれた。

家族には、夜中に家を出たことも、その後も、何も連絡することができなかった。

生まれて初めての入院だった。

不全流産のため、翌日、子宮内容除去術を受けることになった。

翌朝、手術台に寝かされていた。

先生たちに囲まれて、点滴を打たれた。

「目が覚めたらもう終わっていますよ。」「はい、眠くなります、1・・・2・・・3・・・」そう聞こえていたと思ったら、急に目の前に真っ黒い襖が、両側からピシャッと閉まった。

そして、同時にまた、パッと開いて明るくなった。

すかさず耳元で「はい、終わりましたよ」と聞こえた。

（えっ？終わった？）私には、鮮明な意識がずっとあったような感覚だったので、あまりにも一瞬過ぎて、手術が終わったことが信じられないくらいだった。

私の初めての麻酔体験は、まさしく『一瞬』にしか感じられない驚きの体験だった。

それからまた病室に戻り、一泊の入院の後、帰宅した。

帰宅先は、やはりやつのアパートだった。

家族には心配をさせたくなかったのだが、どこにいても、結局連絡をすることができなかった。

話もできず、両親にしてみれば、娘は夜中にいつの間にか車でどこかへ行ったまま帰らないのだから、むしろ心配させてしまうことしかできなかった。

退院してからの私は、身体のサイクルが元に戻るのを確認できるまでのしばらくの間、基礎体温を付けることを義務づけられた。





## Xデー

---

「子宮の中を器具を使ってお掃除をしたので、子宮の壁が傷ついている可能性もありますから、3カ月くらいは妊娠しないように気をつけてくださいね。」先生にはそう言われていた。やつにだってその言葉はちゃんと伝えていた。

でも・・・なのに・・・なんと基礎体温表は、ひと月のサイクルの変化も見られないまま体温が上がったままの高温期の状態が、しばらく続いた。

もしかしたら・・・そんな不安はやがて確かなものになっていった。

その一ヶ月に満たないという期間が、どれだけその時の私にとって不安なことであったか。

私の小さい時からの夢、それは自分の子供を持つことだった。  
自分の子供、その存在に会える日を、小さい頃から夢見ている。  
それがこんな形であれ実現しそうだったのに・・・。  
もうあんな辛く悲しい思いは絶対にしたくなかった。

日が経つにつれ、妊娠が確信になっていく、とともに不安で、心配でたまらなくなっていく。  
3か月は、という期限を付けられていたのに・・・。

今度ばかりは、早い時期に病院を訪ねた。  
診察してくれた先生は「妊娠しないように気を付けてくださいね」と言った、その先生だったけれど、その時は「大丈夫ですよ」と言った。  
なんだか複雑な心境だった。  
本当に大丈夫なのだろうか・・・確信はあるのか・・・やはり、心配でならなかった。

その日から、陸が私の身体に宿ってから離れてしまった日までの日数と同じだけ経過した日、その日が私の中で目標のXデーになった。  
排卵日であろう日から数えて、何週と何日目のその同じ日。  
その日が、その日まで無事に過ぎさえすれば、きっと本当に大丈夫だろう・・・そう思えたのだ。  
そして、カレンダーにもXデーを印した。

しばらくは先生の言った通り、何事もなく順調に過ごせていた。

このまま、無事にXデーを迎えられることを祈りながら、一日一日、消しながら数えて過ごした。

ところが……。

人間の身体は、なんて不思議なものなのだろう。

気にしすぎた為のストレスだったのか、妊娠という神秘が身体に与えた悪影響なのか……。

心して迎えたXデー、まさしくその当日に、なんとまた出血してしまったのだ。

頭の中が真っ白になった。

## この子はどうしても産みたい

---

まただ・・・また赤ちゃんがダメになる・・・気持ちがパニック状態になった。

今度は時を待つことなく、時間外ではあったけれど、急いで救急外来を訪ねた。

幸いにも、たいした出血ではないのでさほど心配する必要はない、ということで、お薬をいただいただけで帰宅が許された。

確かに、陸の時に比べたら、今回の出血は、色も全然薄かったし、腹痛もほとんど感じなかった。

その頃の私の環境はといえば、ストレスだらけだった。

会社では、結婚もしていないのだから、当然妊娠のことなど誰にも話せなかった。

体調不良という理由で、何日も休暇を取っていて、周りから「どうかしたの？」と聞かれても、ただ「ちょっと具合が悪くて・・・」と答えることしかできなかった。

仕事柄、多少の重たい荷物も持ち運びしなければならないし、外出や急いで移動も当り前に振舞うしかなかった。

もちろん、家族にさえまだ、とても言えない、という状態だった。

一人で『秘密』を抱えて平常を装って過ごしていた。

やつは、本家との決着をつける様子もなく、自分の身辺整理もできていないくせに「私との結婚・・・」なんて言葉を簡単に口にして「早くご両親に会いたい」なんて勝手なことを言っていた。

私はそんなやつを、なんて軽い男だ、と思っていた。

その頃にはもう（私は独りでもこの子を産んで育てる）そう心の中で考え始めていた。

ただ・・・両親のことを思うと複雑だった。

今まで、本当に、よく黙って見守ってくれたと思う。

きっと（様子がおかしい）と、ずっとずっと気にしていたに違いない。

でも、いつか私が自分から言い出すだろう・・・と、じっと待っていてくれるのだろうとわかっ  
ていても、言えない状況が、とても辛かった。

やつが、あまりに自信ありげに前妻さんとの離婚を口にして、しつこい程に私の両親への挨拶を望んでいたの  
で、私は、思い切って両親に、とりあえず現状の報告だけはしておこう、と決心した。

私は、やつを家に連れて来て、両親に会わせた。

そして、今までの一部始終を話した。

父は自分からあまり言葉を発する人ではなかった。

代わりに、母が話を聞きながら、やつにいろいろ質問をしていた。

やつは、今はまだ離婚できていないが、私と結婚したいという意思がある、と伝えていた。

私は、確信のもてない話をすることはできなかったので、やつの言うことを、ただ黙って聞いていた。

それよりも私は、一度流産をしてしまったこと、そして今もまた妊娠しているということ、さらに、また出血をしてしまっていることなど、今まで言えないでいたことをきちんと伝えたかった。

そして、そんなことをすべて知ってもらった上で、そのために会社も休みがちになってしまう、ということを知ってほしかった。

つまり『私はどうしてもこの子を産みたい』という堅い意思を理解してもらいたかった。

母は「うすうす気づいてはいた」と言った。

そして反対することもなく認めてくれた。

## 人生で一番？と思えるほどの喜び

---

両親が理解者になってくれたことは、私にとって何よりの安心だった。

お陰で、多少の出血は相変わらず続いていたけれど、自宅では心穏やかに、ゆっくりと過ごすことができた。

ただし会社はそうそう休んではいられなかった。

出血が落ち着いた頃を見計らって、平然を装って無理に出勤すると、会社のトイレで、便器が真っ赤に染まるくらいの出血を見ることもあった。

そうなる、居たたまれなく落ち込んだ。

何日か休んで後出勤すると、必ずまた出血するので、またしばらく休んで自宅療養する。

そんなことの繰り返しの日々が一月くらい続いていた。

病院で何度か診察を受けていたけれど、胎児はまだ確認できる大きさではなかったのか、一度も超音波に映る姿を見ることはできないでいた。

年末のある診察の日、堅い表情で先生が言った。

「これだけ長い期間出血が続いているので、もしかしたらお腹の中の赤ちゃんは、残念だけど、すでに亡くなってしまっているのかもしれない。年内の最終日に、もう一度だけ超音波で診察してみましよう。その日にはつきりと確認できなければ、そのまま入院してもらうことになります。・・・99パーセントくらいの確率で、諦めてもらった方がいいかと思います。ですから、一応、入院の準備をして来て下さい」

なんとも残酷な宣告だった。

一度は、ダメかも・・・とは思ったけれど、やっところまで希望を持って来られたのに・・・。

当時はまだ、超音波診察は特別な診察だったので、決まった日にしか胎児の様子を見ることができなかった。

その日から私は、年内の最終超音波検診日までの一週間で、気持ちの整理を付けなければならなかった。

信じたくない、諦められない・・・けれど、現実を認めなければいけないという、とても辛く、複雑な思いで過ごす日々だった。

私は、なんとか、赤ちゃんとさよならする覚悟を決めて、沈痛な面持ちで指定された日に入院の準備をして診察に向かった。

診察の場所は、いつもの外来ではなく、特別に予約した人だけが来る場所だった。

部屋に呼ばれて入ると、先生もいつもの健診の時の先生ではなく、超音波専門の初めて会う先生だった。

宣告を受ける為に来た、そんな緊張感の漂う、何とも嫌な時間だった。

お腹にジェルを塗り、超音波器具をあて、じっとモニターを見つめる先生が、これから発する言葉を、耐えるような重苦しい気持ちでドキドキしながら待っていた。

すると・・・

「元気に心臓が動いていますね」と、さも当たり前のように、多少笑みさえも浮かべながら、やさしく先生が言った。

（えっ？）私は一瞬自分の耳を疑い、次の瞬間「うそ！？」と発していた。

「うそじゃないですよ、ほら見てご覧なさい」先生は、何を言っているの？とでも言いたそうに、そう言って、モニターを私の方に向けて見せてくれた。

そこには確かに、規則正しく点滅している、小さな心臓がしっかりと映し出されていた。信じられなかった・・・。

胸の鼓動はさらに高なっていた。

（夢じゃないよね?!?!）そんな気持ちで、しっかりとモニターを確認した。

うれしくて胸がいっぱいになり、言葉にならず、ただただ、涙が溢れ出てきた。

泣きながら私は、戸惑っている自分の状況を説明するために、精一杯の声を出して言った。

「ダメだろうからって言われていたので・・・入院の仕度をしてきたんですけど・・・」

「その必要はないですよ。だって赤ちゃんの心臓、こんなに元気に動いているの、見えるでしょ」先生は、頬笑みながらそう答えてくれた。

こんなにうれしかったことは、人生で初めてではないか、そう思えるくらいの感動だった。

## 母はつよし

---

「ありがとうございました。」涙でグジャグジャになった顔で、私は先生に心からお礼を言った。

その日、先生は病院の移動が決まっていた、その病院では私が最後の患者だったらしく、先生も感慨深げに「もう心配はいりませんよ。頑張って元気な赤ちゃんを産んでね」と励ましてくれた。

私はそのまま、必要のなくなった入院用の荷物を持って、帰宅することができた。

そして私は、仕事を辞めることを決心した。

25歳になった冬だった。

不思議なことに、出血は、退職したらピタリと止まった。

けれど、母親にしてみれば心配でしかたなかったのだろう。

「そんなに出血していたら、生まれてくる子は奇形児になってしまうのではないか・・・墮胎してしまった方がいいのではないか・・・」そんなことを言うことがあった。

でも、私の決心は固かった。

こんなに生命力のある子だから大丈夫。

たとえどんな子が生まれてこようと、私は絶対に産んで育てる。

たとえ独りで育てることになろうとも・・・。

その思い以外はなかった。

仕事を辞めた私には、何よりの生きがいがいった。

思案していた母には「この子は今の私の生きがいなの」そう言った私の言葉が、相当胸に響いたらしい。

それからは何も言われなくなった。

携帯電話なんかない当時は、家の電話を使うのが当たり前だった。

やつはアパートに電話を入れていなかったの、会社に電話をする以外、やつと連絡を取る方法はなかった。

やつの本家の奥さんは、私の存在を知っていたようだった。

どうやって電話番号を知り得たのか「やつがそこにいないか？」と、私の実家に電話をかけてきたことがあった。

私は妻である、ということを訴えているような話しぶりに、私がやつから聞いていたことを話すと「男はみんなそんなことを言って近寄るのよね。」というようなことを言った。

「確かに話の流れで離婚届を書いたことはありますよ。でも、本当に離婚する気で判を押すわけがないでしょ・・・」（あなたは騙されている）そう言われているのだと思った。奥さんにしてみても、やつはやはり、しょうもないやつ、だったようだ。ため息をつくような、そんな感じが聞いて取れた。

やつの言うことは鵜呑みにできない。

やつとの将来・・・そんなことを考えるのは、やめようと思った。

でも、やつの言うことを信じた、というより信じたかった、と言う方が正しいのかもしれないが、両親は、お腹が大きくなる前に結婚式ができればいい、そんなことを願っているようだった。

当のやつは、相変わらずとてもそんな状況ではなかった。

妊娠5か月の安定期に入った頃、私はそれ以上実家に、心配も迷惑もかけたくなかったので、家を出て一人暮らしをすることを決心した。

私が勤めていた会社は、周りの友人達に比べると多少お給料が良かったので、結構蓄えはあった為、仕事はできなくても自立できると思った。

お腹の子供と一緒にだからか、家の手伝いもろくにすることも無いのに、生まれて初めての一人暮らしにも、収入がないことにも、なぜか不安はなかった。

母になるということは、何もない私の気持ちを、とても強くした。

当然のようにやつも同居することになった。

形ばかりだが、同棲生活のようなものが始まった。

けれどやつは、どこに行っているのか知らないが、普段は帰らないことも多く、まるで、好きな時に来ているというような、そんな状態だった。

やつにとって私はもう、籠の鳥だった。



## 転職

---

私が会社を辞めた後、社内がどんなだったのか・・・はっきりとはわからないが、たぶんいろいろな噂はたっていたのだろう。

40日もあった休暇を、ほぼ4カ月ですべて使い切ってそのまま辞めてしまい、体調不良の原因さえ誰にも知らせていなかったのだ。

そして、やつだって休みがちだったり、帰宅が早かったりと、不審に思われていたに違いない。怪しい私とやつの関係・・・。

そういう意味では、やつも残された環境には相当ストレスを感じていたのかもしれない。

帰宅すると「誰かにずっと付けられているようだ」などと口走ったり、泥酔してタクシーで帰って来たりすることも多かった。

けれど、そんな時はいつも所持金がなく、外でタクシーが未払い金を待っていた。

やつは二重生活をしていた為か、一応本家にお金を入れていたのか知らないが、それ以外にもそのような浪費家だったようで、かなりあちこちから借金をしていたようだった。

確かにやつは、付き合いだした頃から、急に必要になったのでとか、今持ち合わせがないからとか、お金を貸してほしいということが何度かあった。

わりとすぐに返してくれてはいたが、その頃からたぶん多額の借金をしていたのだろう。

そしてやつは、程なく、左遷なのか関連会社に出向になった。

やつは以前から「じきに独立して、友人と一緒に起業する計画がある。」などと言っていた。

世の中がバブルといわれていたあの時代だったから、そんな夢も叶うような気がしたのかもしれない。

家も建てた、ゴルフ会員権も持っているし、株も結構うまくいっている。

一時はそんな優雅に見える環境だったが、それらがすべてその後の損失の元になった。

友人は先に独立していたらしいが、そちらの事業も結局うまくいかず、夢もいつしかバブルとともに消えて行った。

何もかもが思う通りに行かず、やつはイライラしていた。

そのうち自暴自棄になって、会社も辞めてしまい、無職になった。

無職になってしまったやつは、何もできず動けないでいた。

職を探している風でもなく、私服で家を出て行ってはどこかで時間つぶしをして帰ってきた。

自分が働くことができない私には、やつになんとかして立ち直ってもらうしかなかった。

私はじっとしていられず、やつの代わりに求人誌を買ってきては、やつの転職先はないものか、

いろいろ調べてみた。

やつはプログラム関係の仕事をしていたので、いわば手に職があった。

年齢制限にギリギリではあったが、求人誌にはS Eの募集は意外と多くあった。

該当するものにすべてマーカーで印をして、すかさず帰宅したやつに見せた。

すると、意外な募集の多さに、やつも結構乗り気になって真剣に見入っていた。

そのうち、自ら進んでいろいろな会社に面接に行くようになった。

当時はまだ中堅どころのS Eの人数は少なかったのか、貴重な人材と思われたようで、結構いい条件を提示される、と喜んでいた。

## 何も知らない

---

それからのやつは、転職に味をしめてしまったのか半年ごとくらいに、もっと条件のいいところを見つけた、などと言っては転職を繰り返すようになった。

本当に良かったのかはわからないが、単純だったやつは、とても有頂天になっていた。

そしてその度に「今度こそちゃんとするから」のような、調子のいい言葉を聞かされたが、結局は何度となく裏切られることになった。

私にはS Eの仕事がどんなものなのかわからないので、やつの言うことを信じるしかなかった。

「S Eの仕事は、テストを繰り返さなければいけないので、実際に現場が稼働している時間には動けない。だから夜間にテストをするのが通常だ。それが朝までずっとかかって徹夜になることも多々ある。」

やつにはそんな風に聞かされていたので、なるほど・・・と思わざるを得ないでいた。

とりあえずスーツを着て出かけるので、仕事はしているように見えたが、相変わらず帰らない日がほとんどで、本当に忙しいのか？（テストで会社にいるのか？）

本当に認められてまじめにやっているのか？

確信がある訳でもなく、何もかもが私には不透明な状態のまま、私は相変わらず独りで過ごしていることが多かった。

私ที่บ้านに独りでいると、いろいろなところから電話が掛かってきた。

日中かかってくる電話は、ほとんどが個人名を名乗るものの、金融関係らしき人からだな、とわかった。

でも、みんな「やつはいるか？」とやつの所在を確認するだけで、私とそれ以上の話をすることはなかった。

そしてたまに休日の日中や夜には、知らない女性から掛ってくることもあった。

その女性もまた毎回「やつはいるか？」の確認だけだった。

いないことが分かればそのまま切っ飛ばし、自分を名乗ることはしなかった。

ある日の夜中に、泥酔状態の男性が電話をしてきた。

その人は、自分はやつの弟だと名乗った。

やつは3人兄弟の長男で、2人の弟がいた。

末の弟が東京に出て来ている、という話は聞いていたが、電話の相手はその末の弟のようだった。

私にとって、やつの親族と言う人の声を聞くのは初めてだった。

弟だという人はとても怒っていた。

やつにではなく、私に対してだった。

「俺は義姉さんには世話になったんだ。なのに・・・なんで・・・」などと、酔った勢いか、グ  
デグデと怒鳴って暴言を吐いていた。

私は何も言えず、ただ黙って聞いていた。

私は、本当に、やつのことを何も知らなかった。

## 夢の出産

---

そのうち私も臨月を迎えていた。

予定日を10日過ぎても全く生まれそうな気配がなかったので、誘発を勧められ、入院することになった。

入院当日、昼過ぎには病室に入ったものの、誘発を始めるのは翌日からということで、その日は病院内を自由に歩き回ることができた。

売店で本を買って、シャワーを浴びてから、公衆電話で母親と話をした。

母から「どう？」と聞かれて「誘発は明日からだって。今は、下痢しちゃってるみたいでお腹が痛い」と答えると「じゃあまだだね」と母が言い、私もそう思っていた。

電話は数分、簡単な会話を交わしただけで、私は病室に戻って、本を読みながら就寝した。

私は普段から体質的に、多少の刺激ですぐお腹が反応して、ゆるくなってしまうのだが、この日も少し下痢気味だったのだ。

ところがその下痢が陣痛の刺激からだった、ということに、その時は気付かないでいた。

腹痛は、その夜から止むことなく、さらにだんだんと強くなっていった。

誘発を受けることなく、自然の陣痛がタイミングよく入院とともに始まって、夜中には10分間隔くらいになったが、それがそのまま朝まで続いていた。

私は、痛みで朝食をとることもできなかった。

回診では「まだもう少しかかるかな」そんな感じだったけれど、その数時間後、赤ちゃんの頭が見え隠れするようになる排臨の状態になっているからと、いよいよ分娩室まで歩いて行った。

分娩台で、ただ痛み苦しんでいた私に、看護師さんがポンとおしりを叩いて「痛みに溺れてるんじゃないよ」と言った。

私は（はっ）と我に返り、母親学級で教わった呼吸法を思い出して、頑張っているお腹の子にいっぱい酸素を送るつもりで、一生懸命深呼吸しようと試みた。

でも、その深呼吸という行為が、痛みでうまくコントロールできず、自分の呼吸さえ思い通りにできない状態だった。

そんな経験は産まれて初めてだった。

というより、なかなか味わうことはないだろう。

しばらくして助産師さんが「切ったら出るね」と言ったのが聞こえた。

（これから切開されるんだ・・・）と思うと、少し緊張したが、切った、その瞬間が確かにわかった。

でも、切ったことを認識した程度で、陣痛の強さは切られた痛みさえも感じさせなかった。

次の瞬間・・・産まれた。

男の子なのか女の子なのか・・・最初にそのことが気になったけれど、誰も何も言ってくれなかった。

妊娠中の周りの人たちの評判は、みな「たぶん女の子だろう」だったので、私もその気になっていて、お腹の子は女の子なのだろうと思い込んでいた。

でも、なぜか自分で聞くことができなかった。

誰かが言ってくれるまでドキドキしながら待っていた。

その短いはずの時間がすごく長く感じた。

ところが、しばらくして聞こえた助産師さんから発せられた言葉は「おちんちんがついてる」だった。

それは、なんだかキツネにつままれたような感じで（えっ！？うそ・・・！？ほんとに・・・？）そんな感覚だった。

まもなく目の前に赤ん坊が抱きあげられてきた。

私は、初対面した我が子の全身をくまなく点検していた。

初期にあんなに長いこと出血が続いていたので、どこか変わったところはないだろうか？

そんな、少し緊張感を持つての対面だった。

予定日を2週間近くも過ぎて産まれたので、爪が長く伸びて、先っぽはギザギザになっているし、髪の毛もフサフサで、横の毛は頬かかるくらいにまで伸びていた。

それは、まるでおじいちゃんのような感じだったが、私に似て真っ黒の至って普通な男の子だった。

涙があふれてきた。

「無事に生まれてくれてありがとう・・・」本当にうれしかった。

私はとても冷静に出産できたらしい。

おっぱいも、つままれるとシャワーのように出たので「わ～、全開だ」と、助産師さんたちが「初めてとは思えないくらい本当に上手なお産だった」と、口々に褒めてくれた。

顔中が産毛で覆われていた「海」は助産師さんたちに「モンチッチちゃん」というあだ名を付けられた。

## 海との生活

---

母乳は驚くほどよく出た。

吸われると勢いづいて勝手にシャーシャーと出てきた。

飲み込むのが追いつかず、海はよくむせてしまっていた。

あまりにも勢いよく出てくるので、我慢できずに口を離してしまうと、母乳がシャワーを浴びるように顔にかかってしまう、というようなことが何度もあったので、タオルは必需品だった。片方を飲ませていると、反対の胸からも勝手に噴き出してきたので、お乳をやる時は2本のタオルを準備して、両方の胸を出して片方はタオルで抑えながら、片方は飲ませながらもすぐ塞げるように、と飲ませる度に大騒動だった。

おっぱいを飲んでいない時でも、私の胸は勝手に張って吹き出したので、下着に入れる市販のパットでは間にあわず、タオルを入れ、一日に何本も取り換えなければならなかった。

お陰で普通に着られる服は少ないし、大きく張った胸が邪魔で足元は見えないくらいになっていた。

そして、母乳が出たのですごくお腹が減って、夏だったせいもあってか、とてもものが渴いた。けれど、ものすごい勢いで食べて飲んでいたのでかかわらず、妊娠中に15キロも増えた私の体重は一か月で元に戻っていた。

私は身長が高く大柄で、さらに自分自身は15キロも太ったのに、産まれてきた時の海の体重は、普通よりお腹の中での滞在期間が2週間近くも長かったにもかかわらず、3000グラムに満たなかった。

けれど、一か月検診ではその体重も4500グラムに増えていた。

もちろん、粉ミルクなどは買ったことはなかった。

産まれた時は「こんなに大きな身体しているのに小さく産んで」と笑われたが、この時はまた「小さく産んで大きく育てて優秀だ」と褒めてもらった。

やつも元来は子供好きのようではあった。

家に居る時はあやしたり、風呂に入れたりと多少の世話はしてくれた。

でもない時の方がはるかに多かった。

私はお座りのできない赤ん坊を、独りでお風呂に入れる方法など、独りで子育てする術を少しずつ学んでいった。

そんな私の状況を知ってくれているかのように、海はあまり泣くこともなく、本当に手のかからない赤ちゃんだった。

私にとって海との二人の生活は、とても楽しかった。





## やつとの将来？

---

やつが家にいる時はほとんど寝ていた。

その間に私は、スーツのポケットやカバンの中など、やつの持ち物の諸々を確認した。

本当にまじめにやっているのか、何か手掛かりがないか探していた。

すると、いろいろな金融機関、いわゆるサラ金の借入明細がボロボロ出てきた。

知っている都市銀行は、ほとんどすべてでカードローンが組まれていた。

中にはとんでもなく高額な利率のサラ金もあり、利息だけでも月に数万になる、驚くような明細も含まれていた。

やつは、欲しいと思ったものがあると、それは人でも物でも、とにかく手に入れなければ気が済まない性質だった。

しかも欲しがるものは高額なものが多く、いくらダメだ、無理だ、と制したところで、その場では諦めたかのように見えても、後にカード会社から請求が来たり、ローンを組んだ明細が出て来たりして、いつも驚かされてばかりいた。

見栄っ張りなのか、会社でも後輩をつれて飲みに行き、すべて払うのだろうか、飲食店からの請求明細は十数万ということも多かった。

初めて私を誘ってきた時も、高級なレストランにつれて行かれ、私はあまりなじみがなかったのに驚いたこともあり、確かにどこへ行っても羽振りが良かった。

やつと一緒に生活している以上、借金だらけな状態は耐えられなかった。

しかたなく、とりあえず利息の高い怪しげなところには、私の貯金を崩して元金返済をしてもらった。

そしてやつには、もう二度とそこには手を出さないという約束をしてもらった。

私が返済を済ませた後しばらくは、まじめにやっているように見えた。

けれど、落ち着いたかなと思っている、のもつかの間、また新たに借金を作っていた。

まじめにやるから、ちゃんとするから、まともになるから・・・何度も聞いていたやつの「今度こそ」は、逆に不安にさせられるだけの言葉にすぎなかった。

私は真剣に自分の未来を考えれば考えるほど、やつとの将来はないな、と思った。

そう考えた時に一番気になったのは、海のことだった。

この子には私しか家族がない。

もし万が一私が、別の人と結婚するようなことがあったとしたら、そこに生まれるかもしれない子と比べると、血のつながりが私しかいないということをしごく不憫に思った。

この子に兄弟を作ってあげたい。

もし私がいなくても、兄弟がいれば独りじゃない。

きっと二人の方が助け合うこともできるし、寂しくもないだろう。

だからあえて同じ父親、やつとの子供をもう一人産みたい。

独り、そんな風に思い始めていた。

この子ならもう一人赤ちゃんができてきつと、ちゃんとお兄ちゃんになれる。

手のかからない海が一歳になった頃だった。

そして私は決心した。

## 女の子出産計画

---

海がお腹の中にいる時、周りからは「女の子じゃないか」と言われていた。

私も小さい頃から女の子が欲しいと思っていたし、やはり子供が夢だった私は、男の子も女の子も両方産んで両方育てたかった。

そこで私の女の子出産計画が始まった。

海が生まれた夏は子育てにはとても楽だった。

妊婦としては、暑い時の大きなお腹はとても大変だったが、産まれてからの一か月、新生児の時期などは産着もほとんどいらなかったし、沐浴だって行水感覚でできた。

授乳も、夜中に何度も起きて胸をはだけたまま寝てしまっても、冷えることもないし、もともと薄着だから、本当に簡単で気が楽だった。

マタニティーだって同じものが着られるし、そんな貴重な新生児期の夏は絶対外したくないと思った。

けれど同時に、どうしても私と同じ星座のてんびん座の女の子を産みたい、そんな夢も持っていた。

てんびん座に入るのは9月の下旬からだ。

そこで、まだ夏の暑さの余韻の残る9月の下旬、そのなるべく早い時期に出産することを計画した。

でも、その時の私の生理周期からすると、9月の半ばか、次の排卵では10月の半ばに出産を迎える計算になった。

なので、とりあえず、2週間ほど遅れた海のことを踏まえて、9月半ばに出産を迎える排卵日の方を選択した。

期日はちょうどクリスマスイブになった。

やつにもそのことを伝え、協力してもらうべく、その日だけは決して酒を飲まず、必ず家に帰ってきてくれるよう、約束してもらった。

そして女の子を授かる為に、数日前から自分もちろん、やつの食事にも気をつけてもらった。私は知り得たいろいろな方法をすべて実行して、絶対に女の子を産むに向けて準備した。

子供を独りで育てていくことは、一人でも大変なのに、二人もなんてとんでもないと、母親はまた心配をしていた。

そうは言っても私が一度決めたら聞かないと熟知していたからだろう、やはり反対はしなかった。

そしてイブの当日、私はその瞬間から（女の子が宿った）と勝手にそう確信していた。

とても正確だった私の身体は計画どおり、たった一回で妊娠した。

## 同居している他人

---

仕事もしていなかったせいか、二度の切迫流産がまるでうそのように、お腹の子は順調に育って、そろそろ安定期に入ろうとしていた。

通っていた病院では決して性別は教えてはくれなかったけれど、私はすでにその気で、何のうたがいもなく当り前にピンクのベビー服を買いそろえていた。

たぶん小さい頃から女の子が欲しかったのは、子どもにいろいろな服を着せたいという、着せ替え人形の感覚もあってだろう。

100サイズのジャンパースカートなどまでも準備して、女子服を揃えることを楽しんでた。

けれど、ちょっぴり不安もあった。

もともとは女の子が欲しかったので、男の子が生まれた時、正直びっくりはしたものの、実際には男の子を育ててみたら、可愛くてしかたなかった。

本当に愛おしくて、心から、この子の為なら何でもできる、本気で死ねる、そう思えた。

でも今までに経験したことのないような愛情で、こんなにも愛せるのは、この子が異性だからなのだろうか？と、不思議な感覚だった。

同じような感情を、はたして同性である女の子にも持てるのだろうか？と思っていた。

私のお腹が大きくなってくると、抱っこをしてあげられなくなって、海にはちょっとかわいそうだった。

海だってまだ一歳と数か月の赤ちゃんで、普通なら抱っこ抱っこの盛りだった。

でも、私が抱けないことを言い聞かせていたので、決して駄々をこねることはしなかった。

それどころか、いつもお腹に向かって「赤ちゃん、おいで～よ～」と片言で話しかけて、新しい兄弟の誕生を一緒に楽しみにしてくれていた。

その頃のやつはといえば、本家の奥さんの起こした離婚調停のため、何度か裁判所に出頭させられている、ということもあったが、相変わらず休日でも家にいることは少なく、たまに、出かけて行った外から「今日は帰れない」などと電話をかけてきた。

やつが朝からどこかへ出かけて行ったある日曜日、私は朝から下痢をしていて、とても体調が悪かった。

昼ご飯を食べた後、海をなんとかお昼寝させると、急な吐き気に襲われて、トイレに間に合わず、洗面で嘔吐してしまった。

なんとか這って部屋に戻り、横になった時に、ちょうどやつから電話がかかってきた。

それは、またいつものように「今日も帰れない」という報告だった。

それでも、その時の私は、決してやつに自分の今の状態を話す、ということとはしなかった。

今更やつに言って、帰ってきてもらおう、などという気持ちにはならなかった。

吐き捨てるように、力なく「そう、はい・・・」とだけ答えて、電話を切った。

けれども、ふと我にかえれば、今の自分の状態では、海が目を覚ましても何もしてあげられないと考えると、海が寝ている今のうちに何とかしなければ、と焦った。

私はそのまま実家に電話して、助けを求めた。

まもなく母と弟が車で迎えに来てくれて、私と海は多少の身の回りの荷物だけを持って実家へ行き、そのまましばらく世話になった。

その日は下痢と嘔吐を何度も繰り返し、トイレと布団の往復という脱水状態だった。

「やつはどうしたのか？」と母に聞かれたが「知らない」と答えた。

翌日、帰宅したらしきやつは、部屋に残された残留物を見て察したのか、実家に電話を掛けてきたが、私は起き上がって電話に出ることはしなかった。

具合が悪いのに、さらにやつと話す気などには、到底なれなかった。

様子を見に、やつはここへ来るかもしれない・・・

けれど、顔も見たくない、と思っていた。

## 結婚って何？

---

程なくやつは本家の奥さんとの離婚が成立した。

前妻さんとの間には小学生の子供が二人いたので、やつは二人分の養育費と、慰謝料に代わって、奥さんが田舎に戻って買った家の、ローンを支払うことになった。

やつは特別高収入だったわけではないし、ましてや抱えている多額の借金のこと考えれば、払えるはずはなかった。

やつの離婚成立を知った両親にしてみれば、私との結婚に障害がなくなったという感覚だったのだろう、待ちに待った・・・だったのかもしれない。

やはり、入籍することを勧められた。

やつも乗り気だった。

けれど、私には不安しかなかった。

本当にやつとなんか結婚していいのだろうか・・・それより結婚っていったい何なのか。

今までだって、一緒にいたといえど一緒にいた。

確かに子供の父親はやつにほかならないし、戸籍上、子供に父親はいた方がいいのかもしれない。

ましてやもうすぐ二人目も生まれるのだから、結婚がなんだかわからないが、紙切れ一枚で、子供たちに父親という存在ができる。

それならその方がいいのか・・・

でも、本当にいいのだろうか・・・

不安を抱えたままではあったが、両親もそれで安心するのなら、と、私は流されるように入籍することを選択していた。

いよいよ婚姻届の提出に向けて話が進んだ。

承認してもらう人を、やつの真意をはかるためということで両親の知り合いの弁護士に頼むことになった。

そして、それがたまたま私の臨月の検診の日に、両親とやつと私と海との5人で、私の診察が終わってからそのまま、弁護士さんの所に行くということになった。

ところがいざ検診に行くと、出産予定日まではまだ一週間あったのだが、もう子宮口が開きかけ

ていて、今日中に生まれる確率が高いからと、私は外出せず自宅待機をしているように、命じられてしまった。

しかたなく、私と海は自宅に戻り留守番をすることになり、両親とやつだけが弁護士さんのところへ行った。

そして確かに婚姻届に承認をもらって、皆帰ってきた。

やつはそこで、更生を約束したらしい。

私は、その弁護士さんという人に会ったこともなかったの、なんだか他人事みたいだった。

それよりも私には、先生の言われたとおり本当にその夜から陣痛が始まったので、出産という大仕事が待っていた。

そして、数時間後には無事二人目の子供を出産した。

母はすぐに見に来たが、やつはまたどこかへ出かけたらしく見には来なかった。

それから二日後、私がまだ入院中に、やつが一人で役所に婚姻届の提出に行ってきた。

本当に出してきたのか、見たわけではないけど、何かいろいろ書類をもらってきたようだったので、確かに行ったのだろう。

とにかく私には、何一つ全く実感などなく、ただ紙切れが提出されたらしい、にすぎない出来事だった。



## Sという女

---

予定日より一週間早く産まれてしまったために、てんびん座に入らなかったことは誤算だったけれど、産まれてきたのはみごとに女の子だった。

海は2歳になったばかりだった。

出産前に抱いていた（女の子も愛せるのだろうか？）という、そんな心配は、全く必要ないものだった。

我が子はやはり、男の子でも女の子でも関係なく可愛いもので「この子の為なら死ねる」と思えるほど愛おしい感情は同様だった。

計画通り、念願の女の子の誕生がとてもうれしかった。

相変わらず母乳も出だし、独りお風呂ももう慣れたもので、風が家族に加わり、海と二人だけの時より、より一層心強くなった。

入籍したことで名字こそ変わっていたが、もともと表札を出していたわけでもないし、目に見えてやつの生活態度が変わったとも思えなかったので、やつとの関係においては特別何の変化も感じていなかった。

ただ、配偶者になってしまったという、私の立場は変わったという意識はとてもあった。

やつの前妻さんのローンや、子供たちに養育費を払う、それは私の義務だと思い、毎月かかすことなく振り込みに行った。

やつのお給料はほとんどそれで底をついてしまったため、何もしないやつの代わりに、私が、以前やつが前妻さんと住んでいた家を査定してもらう為に不動産屋を回ったり、かなり厳しくなっている生活の上に、やつが抱える膨大な借金を少しでも減らすために、私ができることは何でもした。

そして、相変わらず昼夜を問わず電話は多方面からかかってくる。

何度か夜中に、やつの所在確認に電話をかけてきていた女は、だんだん言葉数が多くなっていた。

「いない」というと「じゃあ〇〇のところかしら」などと、知らない女性の名前を言った。さらに、前妻さんの名前を出したり、時には（それは私のことでは？）と思うような女性関係の情報を、さも知った風に話したりもした。

そしてついには「私にあんたが〇〇と知り合う前から、〇〇の愛人だったんだ！なのに・・・」と、自分は前妻さんの時代から愛人と言う立場だったのに、私に横取りされた風なことを言い「お金を返せ」などということも、度々言うようになっていた。

ある日のこと、家の外に出るとドアに張り紙がしてあった。

その紙には大きな文字で『結婚もしてないのに子供を産んだしたたかな女』と太マジックで書いてあった。

それはドアからアパートの壁伝いにずっと、何枚も貼られていた。

集合ポストや自転車にも貼ってあった。

そして、それからというもの、同じようなことが書かれた手紙やはがきが毎日のように届くようになった。

それらはすべて差出人が記されていて、Sという女からのものだった。

さらにまたある休日の明け方のこと、まだ寝静まっていた時分に、外から大声が聞こえてきた。

（何事か？）とビックリして眼を覚ますと、ドアの向こう側で女がやつの名前を、何度も何度も呼び叫んでいた。

ピンポンを連打で鳴らして、ドンドンドンドンとドアも激しく叩かれた。

珍しく自宅にいたやつも、啞然として固まっていた。

あまりにも大きな声で「いないのかー！！」と、何度も何度も叫ぶので、恐ろしくてドアを開けることもできず、相手の姿も見ずにそのまま110番通報してじっとしていた。

程なく警官が来て、わめく女をなだめる様子がかがえたと思うと、そのうち外は静かになった。

それからしばらくは、怖いのと恥ずかしいのとで、外に出ることができなかった。

やつは、以前から知っていたその女に、よくお金を借りに行っていた、と、正直に話した。

お金に困ると行っていたので、行けば泊ってそこから出勤する、ということがしばしばあったようだ。

けれども、さすがにその時の騒ぎには参った様子で「もうあいつのところには二度と行かない。お金もちゃんと返す」そう言って約束した。

しばらくの後、私たちはそのアパートを引っ越した。

## 怯える日々

---

あんなに怖い、恥ずかしい思いをしたのだから、当然やつも懲りただろう、もうあの女のところへは行かないだろうと思った。

少し離れた団地に移り住んだ私たちは、やっとあの女の恐怖から解放されたと思った。

やつの通帳は預かって管理していたが、借入の赤い数字ばかりだった。

そんな状況でも、ものを買いたがる癖は直らず、私に「指輪を買おうか」などと言ったこともあった。

けれど私は「とんでもない。そんなお金があったら借金返済して！」と断った。

二度と借りないと言っていたはずの高金利のサラ金からも、また新たに借入している明細を見つけたりもした。

やつはすでにブラックリストに載っていて、クレジットカードは使うことも、新たに作ることも不可能になっていた。

新規作成を何度も試してみてもはいたが、どこでどんなに申し込んでも、拒否されていたので、その点では多少安心していた。

ところが、何をどう間違ったのか、何度も試みた中に、なぜか作成されてしまったカードがあったようで、知らないうちにまた、そのカードを使いまくっていた。

（これだけは子供の将来のために絶対に残しておく）そう思って、なんとか崩さないでおいた私の最後の最後の貯金も、とうとう、泣く泣く借金の返済に充ててしまった。

けれど、そんなものも焼け石に水でどうにもならなかった。

借金の利息を返すためにまた別のところから借金をする、といった感じで、借金は雪だるま式に増えていっていた。

借金の総額は計り知れなかった。

金融機関の人らしき人が訪ねて来ることもあった。

家において、電話やピンポンが鳴るたびに常にビクビクしているようだった。

そんなある日、ピンポンがなって、一通の速達が届いた。

見ればなんと、またあの女からだった。

どうしてここがわかったのか、なぜこの住所を知っているのか・・・

あろうことか、やつはまた通っていたのだ。

呆れることに、やつはお金に困って、また彼女のところへ無心に行っていたようだ。

やつが寝てしまったあと、彼女はやつの持ち物をすべて調べていたらしい。

新しい住所も何もかも、すべてまた知られてしまっていた。

さすがに、私たちが入籍したことも知ったようだった。

その日からまた、手紙、はがき、時には速達が、毎日送られてきた。

彼女はやつのことを本当に好きだったのだろう。

私たちの存在が憎くてたまらなかつたようだった。

手紙やはがきには、毎回同じような内容の、私に向けた憎悪や嫌がらせなど言葉が、つらつらと書かれていた。

やつは今でも私を抱きに来る。

私は貯金を崩してお金を貸している。

私の貸したお金でおまえたちは暮らしている。

私が妊娠した時は、おろすように言われたのにおまえは出産した。

私はおまえを絶対に許さない。

金を返せ。

などなど・・・。

さらには、当時の私たちの住んでいる部屋は9階という高層階だったので「そこへ行って、私たちの目の前で飛び降りてやる」だとか「自分が死ぬ」というような、脅迫めいたことも何度か書かれていた。

手紙の中には、何ページもの通帳のコピーが入っていたこともあった。

それは、彼女がやつの為に振り込んだ日と金額の記録だった。

## 厳しい生活

---

それから数カ月後、Sという女からの手紙は来なくなった。  
が、代わりに彼女の弁護士という人から手紙がきた。  
彼女もとうとう諦め、見切りをつけたようだった。  
やつは2度目の調停にかけられて、またまた、裁判所に出頭することになった。

結局やつは、弁護士を通じて、彼女にお金を返済することとなった。

私たちの生活は実際とても厳しい状態だった。

両親には申し訳なかったが、時には、どうしようもなくなってお金を借りた。  
両親は、結婚式などもせず何もお金をかけていないから、と、何度か工面してくれた。  
それも、かなりの額になってしまっていた。  
会ったことはなかったが、やつの両親も私との再婚を知っていたようで、やつも自分の実家から一度だけお金を借りた。  
私の実家から借りたお金は、やつの実家から借りたお金の三倍にもなっていた。

お金を借りる度にやつは、例によって「今度こそまじめにやるから」と言った。

私も家でできる内職をした。  
ウエディングドレスにパールなどの刺繍をする内職だった。  
針を使う仕事だし、汚しては大変なので、小さな子供たちが起きている日中は広げることはできず、私の作業は夜、子供たちが寝静まってからようやく始められて、明け方までかけて仕上げている。  
内職は時給にすると、せいぜい100円くらいが相場だったが、そのウエディングドレスは、某有名デザイナーがデザインしたオーダー品だったので、それでも月に3万円くらいの収入にはなった。  
それが生活費のすべてだった。

風を産んだことを後悔はしていなかった。  
海はあまり泣かない楽な子だったが、女の子だからか、風はよく泣いた。  
お昼寝から目覚めた時はとくに、必ずぐずった。  
私が家事で手が離せない時、目覚めてぐずり始めたら、海にそばに行ってもらった。  
海がそばに行ってくると、風もあまり泣くことはなかった。  
海が風の寝起きの担当をしてくれたので、本当に助かっていた。

夜は海を先に寝かせてから、風を寝かせた。

といっても風は抱いていないととても泣いたので、かわいそうだが、海には独りで布団に入って寝てもらっていた。

海が隣の部屋の布団の中に入ったら「おやすみなさい」と襖をしめた。

風を抱いて寝かせてから、同じ部屋に連れていく頃には、海はぐっすり眠ってくれていた。

そうして寝かせるのが日課だった。

ある日なかなか寝付かない風をずっと抱いたままあやしていると、海が寝ているはずの隣の部屋の扉から音がした。

（なんだろう？）と思い、そっと襖を開けて見ると、そこには海が立っていた。

海が、小さく襖を開けて、その隙間からそ〜っとこちらを窺っていたのだ。

きっと眠れなかったのだろう。

でも、海は泣きもせず、声も出さずに、ただじっと立ったまま、そっと私と風の様子を覗いていたのだ。

なんてかわいそうな思いをさせていたのだろう。

たった2歳なのに、海は自分がお兄ちゃんであることを自覚していた。

## 運転手のアルバイト

---

風が1歳を過ぎた頃から私は、やつが休日の土日だけに限って、子供たちをやつに任せて外に仕事に出るようになっていた。

やつも本職以外に、週末の夜などにアルバイトを始めた。

やつのアルバイトは運転代行という仕事だった。

仕事で車を使っているような人、あるいは運転手つきのような立場の人が、お酒を飲んだ時、運転手さんを帰してしまった後などに、その人の車を代わりに運転して、家まで車ごと送り届けるという仕事だ。

数人が事務所に待機していて、依頼が入ったら順番に出向くというシステムで、自分の出番が必ず回って来るとも限らないし、当たりはずれも多い仕事だった。

お客さんの自宅で車を降りるので、どんな場所になるのか、何時になるのかもわからないし、解放されるのはほとんどが夜中なので、帰って来る手段がなくなってしまうことも多く、運がよければ終電くらいで帰って来られるか、始発電車まで時間をつぶしてから帰宅するという状態だった。

休日にやつが朝帰りすることになれば、子供たちを預ける場所がないので、私が仕事に行く時は、やつと入れ替わりで出るといった感じで、私は仕事に行きたくても、やつが帰宅していないと、待っていなければならなかった。

けれど「パパがじきに帰るから」と言い聞かせ、見切りで子供たちを置いて出かけなければならぬこともしばしばあった。

しかも、当時はこちらから連絡を取る手段はポケベルくらいしかなかったので、とても不安で危険な行動だった。

そのうちやつは、平日でもアルバイトに入るようになり、何日も帰れないと言うことも多くなった。

たとえ帰って来ても、ポケベルが鳴り「仕事が入った」と言って、また出かけて行くこともあった。

やつは指名してくれるお得意さんができたと言っていた。

何度か呼ばれて行っていた常連の飲食店のママからも「お店が終わった後に送ってほしい」と、度々指名で頼まれていたらしい。

そのママは、偶然我が家と程近いところに住んでいたようで、そんな日はそのまま徒歩で帰って来ることができた。

やつは、そのママという人はやつと同年代のシングルマザーで、どうやら風と同じ年くらいのお嬢さんがいるらしい、と話した。

さらには、子供は、店に出る夜は近所に住む実母に預けているが、昼間は近くの保育園に入れて

いるらしい、ということまで聞いて来ていた。

そして、やつはたまに「お得意さんにもらった」と言って、高級そうな物を持って帰ってくる  
ことがあり「この人は社長なのでとても気前がいい」などと言っていた。

けれどアルバイトの収入自体はたいした額ではなく、借金は一向に減ることはなかった。

そんな生活がしばらく続いていた。



## 再び

---

いつしか私はまた、妊娠したことを自覚していた。

確信はあるものの、病院へは行かなかった。

風の妊娠期間中、ほとんど何事もなく出産を迎えられたので、もう大丈夫だろうと、自分の身体に少し自信がついていたのと、金銭的に余裕がないということが一番にあった。

すでに3か月には入っているだろうと思われたが、初診は4か月目に入ってからでもいいだろう、と考え、仕事もそのまま続けていた。

相変わらず、やつの休日に私が出勤するというスタンスだった。

その日は、朝から雨が降っていた。

多少時間に追われていたので、雨の中を駅まで少し走り、ホームへの階段も駆け上がって電車に飛び乗った。

落ち着いてから、さすがにちょっとまずかったかな、という思いはあった。

その時の仕事は、動き回ることはなくずっと座ったままで、ただパソコンに向かってひたすら入力しているだけ、というものだったが、その日はとても忙しく、朝から一度も席を立つことなく昼休みを迎えていた。

昼休みが遅番の私は、戻ってきた早番の人と席を変えることになっていた。

そして交代の時、その、椅子から立ち上がった瞬間のことだった。

何か降りてきたのを感じた。

あわてて、何の用意もないまま、真っ先にトイレに急いだ。

個室に入り、腰をかがめた途端に、和式の便器に向って、身体から真っ赤な水が流れ出てきた。

その大量の赤い水は、私の意志に関係なく勝手にどんどん出ていった。

私はどう対処することもできず、ただ茫然としていた。

しばらく放心状態だった。

出血が止まって落ち着くのを待つことしかできなかった。

(とりあえず薬局に行き、生理用品を買って来よう) そう考え、それまでの間だけをしのぐつもりで、大量のトイレットペーパーを丸めて応急処置をして、個室を出た。

そして、トイレのすぐ前のエレベーターホールで、下向きの矢印ボタンを押して待っている時だった。

今度は、ストッキングの脚の内側を膝のあたりまで、生暖かいものが伝い降りてくるのを感じた。

見ると、ミニスカートから腿を、数本の赤い線がドンドン足首に向かって走っていた。

あわててトイレに逆戻りした。

個室の中でどのくらいの時間を過ごしたか定かではないが（もう無理だ・・・）と思った。

その後は休ませてもらい、やつが車で迎えに来るのを、医務室で横になって待っていた。

陸や海の時に経験したさまざまなことが蘇ってきて、焦心していた。

迎えに来てくれたやつの車の中で、どこの病院に行こうか考えた。

それまで陸、海、風とお世話になった病院は実家に近い総合病院で、今住んでいる団地から通うのには困難な場所だった。

今後、通うということを考えて、その時向った病院は、近所の初めて行く産婦人科だった。

そこは、おじいさん先生が一人に、数人の看護師がいる程度の小さな個人病院だった。

## 空とのお別れ

---

超音波で診察してもらおうと、さっそく小さな胎児が確認された。

心臓が動いているのもちゃんと見てとれた。

ことのほか「赤ちゃんは大丈夫ですよ」と言われて、ひと安心した。

その日はとりあえず出血止めの薬をもらい、一週間後の再診となった。

けれど、薬はちゃんと飲んでいたのに、出血は一週間、止まることはなかった。

そして再診の日を向えた。

ジェルを塗ったお腹を確認しながら、先生はモニターを見ていた。

まだ膨らんでいない、おへそより下の部分に器具を当て、あらゆる方向に角度を変えながら、言葉が発することなく、先生はしばらくモニターを凝視していた。

時に眉間にしわを寄せたり、首を傾げたりと、先生からは何だか、ただならないような様子がかがえ、とても不安になった。

（何を言われるのだろうか・・・）先生が口を開くまで、ドキドキしながらじっと待っていた。

（こんなに長時間超音波を当てていても大丈夫なの？）そう心配になるくらい、とても長い時間だった。

そしてようやく先生が、意を決したように、モニターをこちらに向けてゆっくり言った。

「ほら、ここを見て、赤ちゃんがいるでしょ」

そこには確かに、小さな身体の中心に光が点滅していた。

「今度はこっちを見て」

先生はお腹の下の方に器具をずらしながら言った。

「ここにもいます・・・」

そこに映って見えたのは、形のはっきりしない、ぼんやりした影のような映像だった。

「双子ですね、二卵性の。でも、こっちの子はもう、溶けかかっている・・・」

それは、なんとも衝撃的な言葉だった。

一つの子宮の中に、元気に心臓を動かしている胎児と、幽かに形を窺うことができるだけの胎児が存在していた。

本来なら、お腹の中で胎児が亡くなっている稽留流産は、掻爬の手術をしなければならなかった。

けれど、同じ子宮の中にもう一人、別の胎児が生存しているので、それはできない、ということらしい。

先生から「入院をした方がいいですね」と言われた。

この状況で、また困難にぶち当たった気がした。

金銭面のこともさることながら、子供たちのことを考えると、母も職を持っている人だったので、預けられるような人が誰もいなかった。

結局、それはできないということで、毎日注射に通うということを条件に、入院は免れた。

その日から私は、毎日注射をするために病院へ通った。

普通、二卵性の双子は、子宮の中に左右横に並んでいることが多いらしい。

けれど私の場合は、上下二つにお部屋が分かれていた。

一週間前の初めての診察の時は、案外簡単に、心臓が点滅している胎児の姿が確認できていた。

つまりそれはお腹の上側にいた胎児だったようだ。

もし逆に、先に見つかったのが下側にいた胎児だったら、すでに亡くなっているものと判断され、流産として二人共に処置されてしまったのだろうか……。

「空」と名付けた下側にいた胎児の影は、診察の度に薄くなっていった。

そして、映像の中でしか会うことのできなかつたその子の姿は、いつしか、とうとう映し出されることはなくなってしまった。

## 塊が

---

その後も出血はかなりの量で続いていた。

けれど「子宮内で亡くなった胎児の残留物が出ているので、しかたがない」というようなことを言われていた。

私の身体はとても複雑な状態だった。

残存物が出きってしまうまでは出血が続く、それは確かに理解したのだが、子宮は残存物を出すために収縮していた。

けれどそこには同時に、大きく成長しようとしている胎児も存在している。

一つの子宮の中で、相反する動作が同時に進行していたのだ。

毎日注射に通いながら、3歳と1歳の子供と共に過ごしていた。

かなりの量の出血はたびたび、下着にとどまらず洋服まで汚してしまうこともあり、時に、通院の途中で、脚にまで伝ってきってしまうことさえあった。

そして、たまに腹痛もあった。

腹痛止めのお薬ももらっていたが、下腹の形は、いつもとても張っていたので、少しいびつになっていた。

それでもじきに、通院は週一回でよくなった。

当然仕事もできなくなっていたし、通院以外の外出もほとんどできなかったので、なんとか週末に、車でスーパーまでつれて行ってもらって、まとめて買い出しをした。

でも外出すると、きまって出血量が多くなって、腹痛も強くなった。

スーパーのトイレで大きな赤黒い塊が出てきたこともあった。

ある日、買い出しから帰ると腹痛がひどくなり、強いお腹の張りがあったので横になっていた。夏の暑い時期で、冷房もない部屋に寝ていたので当然汗はかいていたのだが、それだけではなく、ひどい痛みに脂汗になっていた。

トイレまでを這うようにして行くその途中、あとわずか数メートルのところ、とても大きな赤い塊が、支えきれなかった下着から零れ落ちてきた。

それはこんにやく一枚くらいの大きさの、まるでぶどうゼリーのような、赤黒い色をした塊だった。

あまりの辛さに、夜中ではあったけれど、念のためその異様な塊も持って、病院を訪ねた。

いきつけの病院は救急外来も受け付けていたものの、おじいさん先生ひとりだけの個人病院だったので、起きて来るまで、待合室でかなりの時間待たされていた。

その間も、私は脂汗をかきながら唸っていた。

やっと起きて来てくれた先生は、私のお腹の形を見て一言「ずいぶん張っていますね」と言い、さらに超音波で診察はしたものの「赤ちゃんは大丈夫だから、このまま様子を見てください」と言った。

私としては、痛みをなんとかしてもらえるんじゃないか、と、期待して行ったのに「痛みには耐えるしかないから薬の量を増やしましょう」とだけ言われ、なんの処置もしてもらうことはできなかった。

結局お薬をもらっただけで帰えることになり、がっかりしてしまった。

そして「こんなものが出ました」と、持っていった塊については「胞状奇胎ではないと思うけど……。一応病理検査に出してみましよう」とだけ言われ、なんだかあっけない思いだった。

せっかく行ったのに何のことはなく、辛さだけが残り、とても疲れてしまった。

## しかたがないこと？

---

確かに、どんなに痛み苦しんでいても、いつしか疲れて眠ってしまい、朝にはずいぶん楽にはなっていた。

出血が止まることはなくお腹も張る、そんな状態は続いていたけれど、自分にとってこんな異常な状態でも（まれなケースだからしかたがない、耐えるしかないんだ）と、先生の言うことを信じて、先生の言うとおりにしていることしかできなかった。

それでも、たまには外出できるくらい楽な日もあったので、近所にも妊娠が気付かれるようになっていた。

空のぼんやりとした姿が確認されてから、2か月くらい経って、まわりの人にも「もうすぐ5か月です」と話していた頃のある夜のことで、また激しい腹痛に襲われた。

（我慢していればまたじき眠ってしまい、朝には治まる）そう思って、脂汗を流しながらも、布団を握りしめて耐えていた。

けれど、辛さは今までにないほどで、まるで陣痛のようだった。

やつが見かねて「病院へ行こう」と言った。

（でも、痛みには耐えるしかないと言われたし、どうせまた薬をもらうだけだろう）そう思ったので、私は「いい・・・」と拒んだ。

動くことさえ苦痛だった。

けれどもやはり、痛みはとても辛く、何とかならないものか、という思いは確かにあった。

耐えている時間が長くなればなるほど、すがる思いが強くなっていった。

（もしかしたら、今すぐ来て下さいと言ってくれるかもしれない・・・？）そんな期待が生まれ、遅い時間ではあったけれど、一応病院に電話を試みることにした。

電話に出たのは看護師なのか、若い女性だった。

私が「ハアハア」と肩で息をしながら、やっとの思いで今の苦しみの状態を伝えると「今何ヶ月ですか？」と聞かれた。

「もうすぐ5ヶ月目に入るところです」と答えると「じゃあまだ生まれませんよね」と、その人は、カルテを見してくれる様子もなく即答した。

それでも私は、普通の妊娠と少し違う点、先日も救急で訪ねたことなど、必死に食い下がって、もう少し詳しく経緯の説明を試みた。

けれども結局、先生を呼ぶとか、何か行動を起こしてくれる様子もなく「じゃあもっと強めの痛み止めのお薬を出しますけど、今日はもう夜中なので明日の朝取りに来て下さい」とあっさり言われてしまった。

そしてさらに、迷惑そうに「なるべく電話も日中にして下さい」とも付け加えられた。

(やっぱりだった・・・) 私はそう思うと、落胆の気持ちで、倒れるように布団に戻った。

そんな私の様子に、やつの方が落ち着かないようだった。

必死で耐えている私に「別の病院に行こう」と言った。

それは、子供たちの出産でお世話になり、何度か救急外来も訪ねたことのある、実家近くの総合病院のことだった。

(確かにあそこなら・・・) そんな希望はあるものの、それでも私は躊躇した。

今のこの辛い状況で、ここ数カ月の出来事を一から説明しなければならない、ということを考えると、それがとても大儀で面倒で、たまらなく負担に思えた。

そして、まだ(朝まで我慢すればきっと・・・)と信じる気持ちがあった。

けれどやつが「もう見てもらえない。とにかく行こう」と言い、半ば強引な形ではあったが連れ出され、総合病院に行くことになった。

自分で決断するならば面倒が先に立ち「ノー」だったのだが、無理やりでも総合病院に行けるということは、やはり(何とかしてもらえるかも)という思いがあり、正直嬉しかった。



## 異常な形状のお腹

---

懐かしい総合病院の救急外来に着き、私は真夜中の暗い診察室に寝かせられた。そこへ、とても見覚えのある先生と看護師さんが来てくれた。

その先生というのは、風を出産した時に取り上げてくれた担当医だった。

もともと厳しい感じの先生ではあったが、私にとってはあまりいい思い出ではない、実はちょっと苦手・・・という印象を持っていた先生だったのだ。

というのも、風の出産中に複雑に裂けてしまった部分の縫合の時に、私は麻酔されることなく痛みを耐えているという状況の中、リラックスを促す為なのか、ラジオから音楽を流しながら「複雑すぎて原形がわからなくなった」と言って、もう一度抜糸をしてやり直すということがあったからだ。

さすがに二度目は麻酔をしてくれたが、最初の縫合時は、出産そのものより痛かったと記憶していた。

先生は覚えていないだろうが、そんな、私にはあまり気持ちのよくない思い出だった。

けれども、信頼のおける先生であることはわかっていたし、初めて今回の主治医のおじいちゃん先生以外の先生に見てもらうので、心境としては、何よりも（助けて下さい・・・）という感じだった。

何を言われるか、緊張しながら衣服を捲りあげてお腹を見せた。

子宮はかなり収縮していたようで、お腹の形は、5か月だというのに全体にふっくらした感じではなく、まるで、大きな玉を無理やり入れたかのような、極端に真ん中だけぽっこりと出っ張った形状に膨らんでいるといった、異様な形だった。

そんな私のお腹を見た先生は、第一声「なんだ、これは！」と、まるで怒ったように言った。

私は、先生のあまりに驚いたような様子と、その声に恐ろしささえ感じ、動揺して「子宮です」なんて、当たり前のことを答えていた。

面倒だ、などと思う気持ちはもうなくなった。

初めて事の大変さを知ってもらうことができた、と安堵を感じるとともに、先生のその厳しい様子から、やはりただ事ではないのだ、と自覚もした。

私は一生懸命順を追って、それまでの経緯を必死に説明した。

「今までどこの病院にかかっていたんだ？」

「こんな状態で先生は入院しろと言わなかったのか？」

先生はちょっと声を荒げたような感じで私に問いかけてきた。

「私が入院しないと聞いたんです」

「入院しろとは言われたんだな」

念を押されたので、はっきりと「はい！」と答えた。

先生の迫力に、そう言わないと大変なことになるような、そんな気がした。

先生は掛かっていた病院の先生を知っていたらしく

「おかしいな・・・あの先生が・・・ちゃんとした先生だと思うんだけどな・・・」  
などと独り言のように呟っていた。

収縮止めの点滴を入れてもらい、私は病室に移って、そのまま入院することになった。

「こんなにお腹が張っていたら、赤ちゃんも苦しかったはず」  
看護師さんにそう言われて初めて（早くこっちに来ればよかった）と後悔した。  
それまでは自分が耐えることばかりしか考えていなかった。

すべての経過を話し終え、理解者ができ、そして入院できたことにとても安堵感があった。  
痛みが楽になったわけではないが、これでもう安心だと思った。

（明日は、楽になって帰ろうね）そうお腹に語りかけていた。  
朝には痛みも収縮も治まって、ふっくらしたお腹に戻れる、と、そう信じていた。

ところが、私の思いとは裏腹に、冷房完備の病室に寝ていた為か、脂汗をかくほどではなくなったものの、堅いお腹と痛みは継続していた。  
今までと認識が変わった私は、自分のことより赤ちゃんのことが心配になっていた。  
ナースコールをして、一向に治まらないお腹の張り痛みを訴えると、点滴を強いものに変えてくれた。

けれど結局、朝になっても状況が変わることはなかった。  
それどころか、痛みは、朝食も取れないほどに、またどんどん強くなっていった。  
海の出産の陣痛でさえ、これほど長時間ではなかったような気さえした。

午前中の回診の時間になり、先生がお腹の子の心音を聞かせてくれた。  
ドツ、ドツ、ドツ、ドツ・・・  
赤ちゃんは頑張っていることがしつかり確認できた。  
それを励みに、私も必死で痛みと戦っていた。

お昼頃には、やつにつれられて子供たちが面会に来た。  
けれど、話をするのがやっとだった。  
むしろそれどころではなく、側に人がいること自体が苦痛だった。  
小さな子供達はとてもじっとしてなどいられなかったのも、やつが「ご飯を食べさせて来る」と、子供たちを病室から連れ出した。

それからしばらくした時だった。  
突然お腹に、ものすごい衝撃を受けた。  
何かがお腹の中で破裂したかのような感覚だった。  
お腹の中の赤ちゃんが、一瞬、両手両足を思いっきり突っ張った？ような、そんな感じだった。  
そして生暖かい水が流れ出るのを感じた。  
急いでナースコールをした。

「破水したみたいなんですけど」

来てくれたのは、昨晚の救急外来で、先生と一緒に話を聞いてくれていた婦長さんだった。

「すごい色になってるね」

赤黒く汚れた、おむつのような下着を替えてくれながら、婦長さんは言った。

それからの私は自分との闘いだっただ。

はっきりと（これは陣痛だ）と悟った。

けれど（どうして！！？・・・）と納得がいかなかった。

まだ5ヶ月しか経過していないのだ。

この先も5ヶ月くらいは、お腹の中で成長し続けてくれなければ困る。

この状態で産れてしまっただは、決して生きては産まれて来られないのはわかっている。

なのに、どうして！？！？

と、自分の身体に焦りを覚えていた。

激しい痛みが絶え間なく続いていた。

お願いだから！

ダメだから！

まだ出て来てはいけないの！

絶対に嫌！

お願いだから、今産まれて来ないで！！

居たたまれなかった。

身をよじらせて必死で陣痛と戦いながら、心の中でそう叫んでいた。

けれども、気持ちとは裏腹に、私の身体は勝手に出産を進行させていた。

そんな中、ほどなく私は分娩台に運ばれて、出産の準備がされた。

## 無念

---

必死でがまんしようとしても、グツとこらえようとしていても、すでに、いきみ始めてしまっていた。

(お願いだから・・・嫌だ～・・・)

泣きながら、胸中ではただひたすら抵抗していた。

けれど同時に、当たり前のように自然といきんでしまっていた。

自分の身体が、意志とは関係なく、これほどまでに真逆な行動を勝手に起こしてしまうことが、信じられなく、情けなく、なんとも悔しくて、涙が止まらなかった。

(いきんではいけない！！産まれないで！)

どれだけ思っても、どれだけ願っても、その行為を自分の力で止めることは不可能だった。

そしてとうとう・・・。

私の身体は、とうとう勝手に・・・

いとも簡単に、産み出してしまった。

私は産んでしまった。

小さな、小さな赤ちゃんをあっけなく産んでしまった。

当然、産声を聞くことはできなかった。

私は、ただただ放心状態で、号泣することしかできなかった。

産まれてきた子供は、たったの250グラムしかなかった。

取り上げてくれた婦長さんが「女の子だよ。・・・お母さんは見ない方がいいね」そう言うと、赤ちゃんをトレイに載せ、向こうの方に連れて行った。

連れられて行く時、一瞬だけ、骨と皮しかないような小さな赤ちゃんが、私の視界の中にも映った。

婦長さんは、その子を産湯に入れて、ガーゼで身体を洗いながら「今度産まれて来るときは元気に産まれて来んだよ」と語りかけてくれていた。

涙をぬぐう気力さえ持ち合わせていない私は、遠い分娩台の上から、その後姿をただただ茫然と見ていた。

やつは子供と対面したらしかった。

「きれいな子だったよ」と言っていた。

子供は「花」と名付けた。

後日、たとえ死産であれ、母体から分娩することが、一番自然で、身体に負担の少ない方法だったのだと教えられた。

婦長さんは「ここへ来た時はもうすでに、かなり出血してたもん。赤ちゃんだけじゃないお母さんだって危なかったんだよ」と、私を気遣いながら話してくれた。

耐えるしかない程の痛みや出血は、流産のなごりで、空ちゃんのための残留物のせいなのだから、しかたがないのだ、とばかり思っていた。

出血が、花ちゃんの方からのものだったことを、その時初めて知った。

花ちゃんが、ずっとSOSを発していたというのに、それに気づけなかったことが、たまらなく悔しくて悲しかった。

とても無念でならなかった。

後から思えば、お腹の中で破裂したような感覚のあった、突然お腹が突っ張ったような感じがした、あの瞬間に、赤ちゃんは亡くなったのではないか。

「死にたくない！」と、最後の力を振り絞って四肢を突っ張ったのではないか。そんな気がした。

## 悲しい記憶

---

翌日、やはりまた、陸の時と同じように子宮内容除去術を受けた。

5年前と同じ病院での2度目の麻酔体験だった。

けれど、本当に一瞬としか感じなかったという、強烈な印象だった初めての麻酔体験とはかなり違っていた。

「これから麻酔に入ります」と言われると次第に眠くなった。

それは、いつのまにか、という感じで、いつ寝たのかもわからないくらい、ゆっくりと効いていった。

目が覚めた時も同様だった。

手術が終わって病室に運ばれている時で、確かに感覚がある状態ではあったが、意識の戻りかたも緩やかで、何だか、ふわふわした感じだった。

病室に戻ると、同じ団地の、妊娠のことを話していた友人がお見舞いに来てくれた。

朦朧とした意識の中で、私は必死で彼女に話しをしていた。

ちゃんとしゃべっているつもりなのに呂律が回らなくて、目を開けているつもりなのに半分見えていないような、意識はしっかりしているつもりなのに、何を言っているのか覚えていないような、そんな泥酔状態のような感覚の中で、私は何かをひたすらしゃべっていた。

何を話していたのか、よく覚えていない。

けれども、彼女が涙を流しながら、ただただ相槌を打ってくれていた、ということだけを記憶している。

退院してからはしばらくは、人にも会いたくないし、外に出るのも嫌だった。

一ヶ月くらいの間ずっと、家の中に籠っていた。

私の身体は例えどんな状態であろうと、出産をした。

だから、悲しいことに、自然とお乳が張った。

そしてそれは日に何度も起こるので、その度に辛い記憶を甦らせた。

一日に何回か洗面台に行き、たまってお乳を搾り出すのが、日課だった。

4歳の海が、私がお乳を搾っているところに来て言った。

「ママ何してるの？」

「おっぱいを搾って捨ててるの・・・」

「・・・そっか・・・飲む赤ちゃんいなくなっちゃったからね・・・」

海も赤ちゃんの誕生を楽しみにしていた。

けれど、そんな兄弟を迎えることができなかった海も涙ぐんでいた。

私たちは二人して、ボロボロとこぼれ落ちる涙と、黄色い初乳が流れていくのを、ただじっと見つめていた。

その後、薬を取りに行くはずだった、かかりつけの個人病院へは、病理検査の結果を聞きに行くことも、一連の結末の報告をすることもなく、一度も行くことはなかった。



## 八方塞がり

---

海も幼稚園に通うようになった。

園の門まで送って、また帰宅時に迎えに行くというのが習慣だった。

お母さんたちは、みな近所ということもあって、子供を通じたお付き合いが盛んだった。

海にも当然仲良しの友達はいただけけれど、私は親同士の付き合いがとても嫌だった。

相手と、親密な関係になるのが怖かったからだ。

皆はお友達親子を自宅に招いて、お呼ばれした方もまた招き返す、といった親子一緒のお付き合いをしていた。

けれど我が家の内情は、そんなことができる状態ではなかった。

毎日をどうやって過ごすか、というやりくりで精一杯なのに、そんなことに回すお金などありえなかった。

父親であるやつのことも、知られたくない部分だった。

一緒にどこかへ遊びに行かないか、などと誘われやしないか、子供が約束して来ると、もし、お母さんも一緒に来ないか、と、声を掛けられたらどう断ろうか、などと、毎日びくびくしながら送り迎えしていた。

そして、そんな実情を誰にも話すことなどできない、知られたくないと、身も心も閉鎖的になっていた。

自分には収入がない。

でも、仕事をしたくても小さな子供が二人いるという今の環境では、フルタイムで働くことはできないので、どうしたらいいのかわからなくて、精神的に八方塞がりの状態だった。

その頃は母親さえも「よくやつと一緒にやっている」と言っていた。

でもいつか・・・もう少し耐えしのげばいつかは、普通の生活ができるようになるのでは・・・  
・「今度こそ」と何度も誓っているやつさえ、本当に今度こそまともになってくれたなら・・・  
。

そんな一縷の望みに賭けながら、今の状況を耐えしのぐしかないと思っていた。

けれどそれは、先の見えない、考えると涙しか出てこないような、不安と緊張ばかりの毎日だった。

相変わらずやつは、どこで何をしているのかわからないことが多かった。

たまに泥酔して、外から変な電話をかけてくることもあった。

「今まで苦勞をかけてごめん・・・。悪かったな・・・。子供たちをよろしく・・・」

母が私を受取人にして、やつに生命保険をかけてくれていたので、たぶん自分が死ねば、それで

保険金が入る、そんなことを考えてのことだったのだろう。

似たようなことは度々あった。

始めのうちは（何を考えているのだろう）と心配したが、心配だけさせておいて、しばらくするとひょっこり帰ってくるのが常だったので、すぐに慣れて（またか・・・）くらいにしか思わなくなった。

けれど、そんなやつの狂言癖は私だけに留まらず、前妻さんにまで及んでいた。

やつのいない夜中に突然、前妻さんから家に電話がかかってきて「やつから変な電話がかかってきたが、何かあったのか？大丈夫か？」と聞かれた。

やつが自殺をほのめかすようなことを言った、とかで、心配したらしい。

きっと、私が相手にしなくなったから、心配してくれる人を求めて矛先を変えたのだと思い「いつものことですから・・・。そんなことできる訳ないですよ」と言うと、前妻さんも納得したのか、呆れて笑っていた。

その頃私と前妻さんは、何度か電話で話しをしていた。

やつのことを話していると、時に長電話になることもあった。

お互いが似ているなど感じ合っているようだった。

## Mという女

---

ある日、やつのいない休日に、若い声の女性から電話がかかってきた。

その子は、Mという名でホステスの仕事をしていると言った。

歳は、私よりもさらに若かった。

彼女の話によると、やつは何度も店に通って来ていた常連で、その度にやつにしつこく言いよられたので、とりあえずしばらくは付き合っていたのだが、あまりにもしつこいので、先日「別れたい」と彼女の方から切り出した。

けれど、やつはそれに同じしてくれなかった。

そして今もまたやつから「会いたい」と言ってきた。

彼女が「会えない」と断ったら、それならこれから彼女の実家に行って火を付けて、自分も死ぬと言って脅されている、というのだ。

彼女はそのように、電話を掛けてきた経緯を話した後、さらに「助けて下さい」と言った。

私は真っ先に（またこんな若い子に、手を出していたのか・・・）と驚いたが、話を聞いていて、またいつもの狂言だろうとは思いながらも、同時に（いい歳をして他人まで巻き込んで・・・）と情けなさに呆れて、怒りが込み上げてきた。

突然、一度にいろいろなことを知ってしまって、とても困惑していたが、とにかくやつが何かを仕出かして、事件沙汰になってはたまったものではないので、なんとかしなければと思った。

やつがどこにいるのかはわからなかったが、彼女が「私が居ると言えば、やつはその場所に来ると思います」というので、とりあえず彼女にこちらへ来てもらって、それから彼女に「あなたの家にいる」と言ってやつを帰宅させてもらい、そこで話をしようということにした。

彼女が家にいることを知って、やつが帰ってきたら、自宅がどんな修羅場になるのだろう・・・そう思うと恐ろしかったが、とりあえず、何が何だか分からない状態のまま、誰にも相談することもできず（何とかしてやつを止めなければ・・・）という気持ちだけで取った手段だった。

子どもたちは実家に預かってもらって、ドキドキしながら彼女を待った。

ほどなく自宅を訪ねてきた黒髪の長い女性は、想像よりきちんとした印象の美人だった。

付き合っている女性の存在さえもその時初めて知ったのに、その初対面の場でまたさらにいろいろな話を聞かされることになった。

やつは彼女にポケベルを持たせて常に連絡をとらせ、そして毎日のように店が終わるのを待ち伏せしていたらしい。

要するに、またストーカー行為をしていたのだ。

（私の時と同じようだ・・・）と、聞くほどに目に浮かぶように想像できた。

彼女は、やつから高価な物などもプレゼントされたので、たまに自分もお返ししたことがあると言った。

その話を聞いた時私は（はっ）として、やつが「お得意さんの社長にもらった」と言っていた高価そうだなと思っていた物が、色々脳裏に浮かんできた。

「もしかして・・・」と聞き返すと「そうです」と肯定され、案の定すべて彼女からのプレゼントだったのだとわかり、改めて驚愕した。

内心は興奮状態だった私とは違い、穏やかに落ち着いているように見えた彼女は「もうきっぱり別れたいです」と、その時はしっかりとした口調ではっきりと言い、最後に「すみませんでした」と謝った。

やつは、彼女が家に来ているということに驚いてはいたが、半信半疑ながらも、やがて自宅に帰ってきた。

三人になったところで、もう一度別れ話を切り出した彼女に、やつが「彼女と二人だけで話したい」と言いだした。

（彼女と二人にして果たして大丈夫なのだろうか・・・）と心配したが、彼女は私の目を見て「大丈夫です」と言った。

彼女のその様子は、とても毅然としていて、私は彼女を信じて同意するしかなくなり、しかたなくも、こともあろうか、私は二人を残して自分の家を出る羽目になってしまった。

私は、戸惑いながらも、とりあえずそのまま、鍵さえ持たずにドアを出た。

すると、中から鍵が掛けられた音がした。

二人きりにしてしまった部屋の中で、やつが興奮して彼女を傷つけやしないかと、とても心配だった。

キッチン近くで話をしていたので、物音がしないか聞き耳を立てていた。

けれど、キッチン側の窓からは、なだめるような彼女の声だけが、たまに漏れ聞こえてきた。

私は家の外の廊下で、ただそわそわしながら待っていることしかできず、それはとても長い時間を感じた。

しばらくすると、決着がついたのか、彼女を先頭に二人が家から出てきた。

どうやらやつも諦めがついたのか、彼女が無事だったのでほっとした。

しっかりとした彼女の表情とは裏腹に、十数歳も年の若いお嬢さんになだめられたやつは、うなだれたように肩を落とし、なんとも情けない姿であり、面持ちだった。

後日やつの留守に、彼女がやつの私物だと言っていろいろなものを返しにきた。

膨らんだ大きな紙袋には（そういえば最近見なかったな）と思うような見覚えのある服などがたくさん入っていた。

彼女は深々と頭を下げ「もう二度と会うことはありません」と言って帰って行った。

大きく胸の開いたTシャツから覗く谷間が、やけに印象的だった。

## 希望

---

私にもなんとか自立する方法はないものか。  
働くために子供達を預かってくれる施設はないか。  
何か自分にも受けることができる支援はないのか。  
今の自分ができることはないか。  
いつしか私は、何かに突き動かされるように調べ始めていた。  
すると、いろいろなことがわかった。  
公立の保育園なら安く入所できること。  
母子家庭などは優先して入れること。  
さらに母子家庭には児童扶養手当など、いろいろな支援制度があること。

今まで何も調べることをせず、自分がなんという無知だったのかと実感した。  
やつを無駄に信じて、耐えることだけを考え、涙するばかりの毎日を過ごしてきたけれど、なんだかやつと一緒にいることが、反って八方塞がりの状態を作っているのではないかと、そんなふうに思えてきた。

もしかしたら、やつと離婚した方が、逆にもっと楽に生活できるかもしれない。  
そう思うと、いろいろな道が次々と見えてきた気がした。  
想像しただけで、胸一杯に希望が溢れて来て、居てもたってもいられなくなった。

その日帰宅したやつに、私はさっそく「離婚をしたい」と切り出した。  
けれどやつは応じなかった。  
例によって「今度こそまじめにやるから」と言って拒んだ。

確かにやつはMとのことがあってから、多少反省したのか、落ち着いているようには見えていた。  
けれど、何度も同じようなことを繰り返してきた今までのことを考えたら、もう、そうは簡単に信じられない。  
というより我慢して耐えていたことさえ、浅はかだったと思えたので、今は、今までとは違う環境で前に進みたい、と言う気持ちの方が強かった。  
子供たちを保育園に入所させれば、自分が働きに行ける。  
その為には離婚するしかないのだ、と強く思っていたので、とにかくそれを諦めたくなかった。

それでもやつは「信じてほしい。信じてもらうには、これからの自分のことを見ていてもらうしか方法はない。だから信じて見ていて！」と懇願した。  
さすがに今度は観念したのかなという気配はして、負けそうになる気持ちが出てきた。

けれど、どうしても子供を保育園に預けて仕事に出たかった私は、離婚の形をとるにあたって、やつにある提案をした。

もし本当にその気でまじめにやる、というのであれば、この先も同居したままでもかまわない。けれど、今はとにかく離婚届を提出して離婚という形だけはとらせてほしい。

私たちはそもそも、婚姻届という紙切れを提出したというだけの結婚にすぎなかったのだから、また離婚届という紙切れを提出したとしても、同居していれば何も状況は変わらないのではないかな。

そして、本当に普通の暮らしができる時が来たとしたら、その時にまた婚姻状態に戻すことだってできるのではないかな。

そう話した上で「お願いだから、私を母子家庭の状態にして下さい。そして形だけでもあなたの住民票はここから移動してほしい・・・」と自分の固い決心と強い意志をやつにぶつけた。

状態は今とは何も変わらない、いわゆる内縁という関係になるだけということで、どうにかやつも同意してくれた。

けれどそれは今までとは明らかに違う、もう簡単には裏切ることはできない状態だということもしっかりと把握してもらわなければいけなかった。

「だけど、戸籍上は他人になるということは、精神的に繋がっているだけの関係になるということだからね。今度もし、また何か同じような間違いを起こしたら、その時はそれで完全に終わりだからね。縁を切るのは簡単なんだからね。とにかく信頼関係だけで成り立っている家族なのだから、もしまた裏切るようなことをしたら、その時はきっぱりとここから出て行ってね。私たちの前からきれいさっぱり消え去ってね。」

と、事の重大さを真剣に受け止めてくれるよう、強く念を押して約束してもらった。

そして、やつと私の関係は、またもとの同居人に戻った。

婚姻状態にあったのは約3年間だった。

本当は収入のある人と同居していると、母子家庭でも手当を受けられるという対象にはならなかった。

いけないことだとわかっていたが、離婚届けの提出と住民票の移動をしてもらい、やつはいないものとして、形式だけは母子家庭の手当ての対象とさせてもらった。





## Aさん

---

将来・・・のことも考慮して、私たちは『離婚後も婚姻時の姓を名乗る』という届出をして、それからはトントン拍子にことが進んだ。

海と風は保育園に入園が決まり、私もフルタイムで仕事ができるようになった。

海は最初、一年間通った幼稚園のお友達との別れをととても寂しがって、保育園に変わることに不安を抱いていた。

「また新しいお友達ができるよ。幼稚園にしか行っていない子より、たくさんのお友達が増えるんだよ」そう言い聞かせていると、何も言わなくなったので理解してくれたのだと思った。

保育園は同じ学年が一クラスしかなく、ほとんどの子供が赤ちゃんの頃から通っているのだから、卒園まであと一年という最年長の組に新たに入るということは、たしかに海にとっては、環境的にかなり厳しいものではあった。

初めて保育園に送っていく日、海はとてもおとなしかった。

朝から口数が少なかったが、少し緊張しているのだと思った。

そして、何一つ嫌がることもなく保育園まで辿り着いた。

教室まで送り「じゃあ、行ってくるね」と振り返ろうとした瞬間、今まで一言も何も言葉を発しなかった海の中から、大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちた。

そして、無言でしゃくりあげた。

その姿を見てたまらなく切なかったが、その場はグッと涙をこらえて振り返り、後ろ髪をひかれる思いでそのまま保育園を後にした。辛かった。

私はずっと前だけを見て、ただ突っ走ってきたけれど、海はまた独りでじっと我慢していたのだと思うと、その先は私も涙をこらえることはできなかった。

一方風は、海の幼稚園の送り迎えについて行くたびに、自分も早く幼稚園に行きたいと楽しみにしていたので、一年早く入園できることをとても喜んでいた。

人見知りをするものの、嫌がることなく通ってくれた。

そして、風の同じ組には、あの子がいた。

やつから聞いていた、運転代行の常連の店のママという人の名字「A」を名乗る子だった。

その名字はその組に一人しかいなかったのだから、きっとこの子に違いないと思った。

その子を送り迎えしていたのは、年配の方だったので、たぶん近所に住んでいらっしゃるというおばあちゃんだろうなと思った。

お母さんとは出勤時間が全く違った為だろう、入園してしばらくは、会ったことがなかった。

その後、初めてお母さんらしき人を見かけた時（あの人がAさん（ママという人）なんだ・・・）とは思ったが、あちらが私たちのことを知るはずもないだろうからと、特に話をするこゝもなく、関わることもせず、一方的な思いは胸の中にしまったまま、ずっと、ただのクラスメイトの保護者として素知らぬふりで過ごしていた。

保育園の送り迎えは、それぞれの親の仕事の時間に合わせてなので、朝も早いし夜も遅くだったりとまちまちなので、親同士の付き合いどころか、顔を合わせることもほとんどなく、私にはとても気が楽な環境だった。

## 仲人

---

Mとの件があってから、やつは運転代行の仕事は辞めていた。

以前私と一緒にいた会社から数えていくつ目の転職先だったのか、その時は少し落ち着いている様子で、勤めていた会社では役職ももらって、部下もいたようだった。

ある日やつが帰宅するなり「部下のT氏の仲人を頼まれた」と言った。

真っ先に（冗談じゃない）と思った。

仲人なんて、責任もあるし、それなりのふさわしい夫婦が二人で受けるもの。

ましてや、自分たちはもうすでに同居人であって、正式には夫婦ではない。

たとえ夫婦だったとしても、私達みたいな人間が受けられるものじゃない。

私達なんかが仲人をしては、相手に対しても申し訳ないし、失礼だ、と思った。

「私たちができるわけがないでしょ」とありえないという思いで、言い返して

断った。

けれどやつは、驚いたことに「もう彼らは私たちの名前を媒酌人として案内状を作成してしまっているから今更断れない」と言い放った。

なんと、ずいぶん前から、承諾してしまっていたようだった。

やつは体裁ばかりを気にしていて、いつも先のことは考えずに行動しているとしか思えなかった。

。本当に信じられないことをする、とんでもない奴だと呆れてしまった。

やつは当然、断ることなど考えていなかったようで、結納の取り交わされる日に招待を受け、しかたなく、私達は二人でT氏の実家のある、とある地方まで何うことになった。

前日の夜のうちに子供たちは実家に預けて、早朝に出られるようにと準備をして寝た。

ところがあろうことか、子供たちがいなかった為にかえって熟睡してしまったようで、予定していた時間に起きることができず、目が覚めたのは、乗るはずの新幹線の発車の時刻だった。

あわてて着替えだけ済ませ、急いで支度をして、ほとんど寝起きのような状態で家を出ても、一時間は遅刻することになった。

新幹線の中で歯を磨いたり化粧をしたり髪の手入れをしたりして、目的の駅までの間ずっと、洗面所で支度に追われた。

T氏の実家に着いた時には両家の親族が大勢集まっていた、一時間以上も遅れた仲人の到着を皆で待っていてくれた。

申し訳ないのと恥ずかしいので、とても顔を上げられる状態ではなかった。  
本当にとんでもなく非常識な仲人だった。

そうして仲人の役目は、その日を限りに終わった。

本当に申し訳ないことをしてしまったと、あの時のことは今でも心苦しく思っている。  
その後、どうぞ彼らが幸せになってくれますようにと、心から願ってやまない。

## 女性からの電話

---

やつは、動揺するとすぐ顔に出る。

そしてとても慌てた。

なので、何か隠し事をしている時に鎌でも掛けると意外とわかりやすかった。

以前から、SEの仕事は、会社の稼動していない時間にテストをするからと、徹夜だと言って帰らないことは多かった。

私には、どこまでが本当なのかわからなかったが、休日でも出勤は当たり前だったし、帰宅してからも「別の人テストをしていてトラブルっているらしい。呼び出しを食らった」などと言っては、また出て行くことが多々あった。

でもやつに対して、かなり疑いの目で見えるようになっていたので（本当なのか？）と、その頃は半分くらい信用できないでいた。

やつは休日、家にいる時はほとんど寝ていたので、私はその間にポケベルをチェックして履歴の中の頻繁に表示されている電話番号を、相手がどこの誰なのかはわからないが、念のためにと、控えておいていた。

ある夜、やつに女性から電話が掛かってきた。

以前にもそんなことは何度かあったが、やつは「会社の部下の子だ。女子でも徹夜している子がいる」そう言っていた。

そしてそのまま「トラブルらしいから」と言っては出かけて行くこともあった。

ただその時は（どうも仕事の呼び出しのような感じではない）そんな気がした。

その子は名前も名乗らず「〇〇さんはいらっしゃいますか？」と言うので「お待ちください」と言って、やつに受話器を渡した。

ただその瞬間、ふとした思いつきで、ちょっと意地悪くオープントークのボタンを押してみた。そんな私の動きには気付かずに、やつは受話器を受け取って話し始めた。

すると、女性の声が、突然受話器からではなく、電話機の本体の方から大きく漏れ聞こえてきたことに、やつはものすごく驚いた顔をして動揺した。

オープントークを解除するには再びそのボタンを押せばいいだけのことだ。

けれど、やつにはその状況さえつかめず、そんな簡単なことも咄嗟にできなかったのだ。

その姿は、滑稽なほどに慌てふためいていて、受話器を放り投げるようにして、いきなり電話を切ってしまった。

その時、やつはすでにパジャマに着替えていたが、そのまま電話を掛け直すこともなく仕度をして、イライラしながら「会社に行く」と言って出掛けて行った。

本当に会社からの電話だったのなら、その私のいたずらに、もっと激怒してもいいはずなのに……。

そんな一部始終を面白おかしく黙視していた私は（ぜったいに怪しい）そう思った。

## 女の勘

---

私は翌朝なんとなく、念のためにと控えていた電話番号を書いた紙を持って出勤した。

そしてお昼休みに、ふいに思い立ち、その電話番号にかけてみようと思ってみた。

緊張してドキドキした。

受話器の向こうから聞こえた声が、男性か、または会社名を名乗ったら、何も言わずに切ってしまうつもりだった。

むしろ、そうなるのだろうと思っていた。

すると「もしもし・・・」聞こえてきた声は、20代だろうと思えるような若い女性の声だった。相手は名乗ってくれないので、会社に掛かっているのか、個人に掛かっているのかもわからなかった。

そのまま黙っていても不自然で怪しいし、かといって相手が誰なのかもわからないので、まさかとは思ったのだが、私は咄嗟に、思い切って名を名乗り「〇〇と申しますけど・・・、昨日の夜、家に電話を下さいましたよね・・・？」と鎌を掛けて聞いていた。

相手は「？」という反応をするのでは、と思っていた。

ところが驚いたことに「あっ、はい・・・」と答えたのだ。

「・・・・・・・・」私は絶句して、息を飲んだ。

サーっと血の気が引く思いがして、次の言葉が出てこなかった。

すると相手のほうから「あの・・・お母さんですか？」と言葉が返ってきた。

さほど驚いた様子もなく、まじめに質問する彼女に、こちらの方がさらに驚いて「え?!？」と、あっけにとられてしまった。

あまりにも突然の事態に、興奮して身体が熱くなっていった。

「お母さんって・・・」

聞けば、彼女はやつから、自分は独身で母親と同居していると聞いていたらしい。

とても気持ちが高揚して身体が小刻みに震えていた。

確かに私は、今はやつの妻ではない。

けれど、とりあえず婚姻期間があり子供もいるし同居もしている。

ましてや、やつよりもずっと年も若いし母親なんかではない。

声が上ずってしまうのを抑えられないくらい興奮していたが、とりあえずありのままの状況と経緯を伝えた。

すると彼女もとても驚いたようすで、やつとのことをすべて話してくれた。

彼女はやつから結婚を申し込まれている。

もうすでに自分の母親に挨拶にも来ている。

やつが高価な物をいろいろプレゼントしてくれるので、母と共にこんなにもらっていいのかと恐縮していた。

などなど、聞かされた内容は驚くようなことばかりだった。

今まで何度か、やつのことでそんな状況に置かれてきたが、女性同士がお互いに被害者という意識を持つと、なぜか一致団結したような気分になり、不思議と何でも話し合えた。

なんと私は、やつの母親ということになっていたのだ。

あまりにも呆れてしまって、おかしくなった。

そしてやつは彼女に求婚し、挨拶まで済ませていたのだ。

もう、怒るところか笑うしかなかった。

「私は、今は、妻でもなんでもありませんから、あなたは結婚していいですよ。そのつもりなんでしたらどうぞほんとに結婚して下さい」

素直にそう思った。

私の気持ちはもう、落ち着いてしまっていた。

彼女が本当にやつと結婚したいと思っているならば、むしろそうしてほしいとさえ思った。

やつが私から離れるなら、その方がなんだかうれしかった。

けれど、借金だらけのやつの実態も、すべて余すことなく教えて差しあげた。

彼女は、やつから知らされていたことと現実とのギャップに、相当なショックを受けたようで「いえ・・・いいです」と力なく小さく答えていた。



## ゼロの幸せ

---

私は帰宅してからやつと会うのが楽しみだった。

怒りよりもむしろ、心なしかワクワクしていた。

早くこのことをやつに話したくて、ニヤニヤしながら帰路についていた。

とうとう約束を破った、という驚きより、いつから裏切っていたのか知らないが、そのしっぽをつかんだという事実が、たまらなく快感だった。

これですべてが終わると思った。

その夜、昨夜出て行ったままだったやつが、帰宅するや否や、私は今日のことを矢継ぎ早に話した。

そしてそのまま「約束だから出て行って」と言った。

「荷物はまとめておくので、必要なものだけ持って今すぐに」と私は、息もつかせず追い返すように言っていた。

やつも驚いてはいたが、言葉を返すことなく身支度をしてそのまま素直に出て行った。

私はとても冷酷だった。

やつの荷物など、もともとほとんどなかった。

当時やつが持って来たのは、布団と少量の衣服と本くらいで、衣装ケース3個くらいのものであった。

家具や家電はすべて、私が自身で買い揃えたものだ。

後日やつが、私がまとめておいた荷物を取りに来た。

どこに身を寄せているのか、やつはお風呂に入りたかった様子で、海に「一緒にお風呂に入ろうか」などと言って誘っていたが、私は「もう入ったから」と、容赦しなかった。

私には未練など全くなく、同情心さえも持ち合わせていなかった。

諦めたやつは、わずかな荷物を運んで出て行った。

その時の後ろ姿が、私の記憶に残るやつの最後の姿だった。

見えない先行きに、涙ばかりで暮らしていたことが、どうして？と信じられないくらいだった。自分自身に収入の道が開けたことで、安心して自信がついたら、それだけで気持ちってこんなに変わるのだ、と自分でも不思議なほどだった。

やつがいなくなったことで開放感と安堵感が得られていた。

そしてそれはこんなにもあっけなく、容易いことだったのかと、驚くほどすがすがしい気分浸

っていた。

養育費を貰おうなどと、調停にかけるようなことは一切考えもしなかった。  
むしろ、そんなことにかけるお金も時間ももったいないし、無駄だと思った。

貯金はゼロで何もなかったが、その代わりに借金との関係もゼロになった。

そんなゼロの状態になれたことが、とにかくうれしかった。

もうどんな電話があっても、全く関係ないと言える。

収入は自分たちだけのために使える。

考えただけで笑みがこぼれ、人生が急にバラ色になった気がした。

やつと全く無関係になったという、その現実だけが何よりうれしくて、それだけで十分に幸せに感じられた。

前妻さんには申し訳なかったが「やつとは別れたので、もう私から養育費を振り込むことはできない」と、そう伝えた。

## パパとの別れ

---

やつが家にいないという環境は、今までと比べてもたいして不思議なことではなかったが、パパはこの先も二度と帰って来ることはない、ということ、子供たちに理解してもらわなければいけなかった。

風にはまだ何もわからないだろうけれど、男の子だし、やつをパパとしてはっきり認識して過ごしてきた海には、私なりに、傷つけないようにと考えたつもりで説明した。

「ママはね、あなたたちと一緒に暮らしていることがとても幸せなの。だから、ママの一番大切な夢はね、これからもずっとあなたたちと一緒に生きていきたい、ということなの。でもね、パパは、ママとは違って他に何か大切な夢があるんだって。だからね、パパはママとは一緒に暮らしていくことができなくなっちゃったの。しょうがないよね」

すると海は「でもパパは一緒に遊んでくれたよ」と、泣きべそをかいた。

あんなやつでも子供にはいい思い出だけが残るのか……。

何だかとても悔しかった。

そこでつい「でも、海だって怖い思いしたでしょ」と、少し強い口調で言ってしまった。

やつは自分の機嫌がいいと子供たちと遊んだが、機嫌が悪い時は邪険に扱った。

気分で子供たちに接する態度が変わっていた。

海は「パパ」と近寄っただけで「うるさい」と怒られて、びっくりすることもしばしば体験していた。

さらに、やつは短気だったので、カツとなると急に驚くようなことをした。

やつが車を運転している時に喧嘩になると、怒ってハンドルをジグザクに動かしたり、いきなり急ブレーキをかけたりして、私たちを脅かすような真似をすることがあったり、家の中でも、キッチンにあったベビーチェアを、私に投げつけたりしたこともあった。

海はそれきり何も言わなくなった。

きっと、さすがに海もそんなパパの姿を見てきたので、いろいろなことを思い出して、理解してくれたのだなと思った。

ある日、私が仕事で遅くなるので、代わりに実家の母に、保育園のお迎えを頼んだ。

その日、母は海に「ママとパパ別れちゃったね」のようなことを言っただけらしい。

すると、驚いたことに海は「パパはカードローンとか使っていたからしょうがないんだよ。それに、あのままだったらママが殺されちゃったかもしれないから……」と母に言ったという

のだ。

(カードローンって・・・) いつの間にそんな言葉を覚えたのだろう。

自分では、子供の前でお金の話などをしたつもりはなかったのに、海の口からそんな言葉が出て来るとは、思いも寄らなかった。

けれど、それはただ、子供の存在が自分の目に入っていなかっただけで、海は、気付かないうちに見ていて、私たちの日常の会話を聞いて、いつの間にかしっかり覚えていたのだ。

私は海に、さしさわりのないことを言って聞かせ、理解してもらったつもりでいたのに、海の方が自分で解釈して、むしろ逆に私に気を使って、私の前ではやつのことには触れずにいてくれたのだ。

この時は本当に、海に「遣られた・・・」と胸が痛くなった。

この頃の海は、食事の時などによく、胃のあたりに小さな手を当てて「痛たたた・・・」と言っていた。

## 母子家庭

---

保育園の海のクラスに、子供の名前の隣に保護者名を記載するように、という用紙が、数日の間置かれていた。

全員の名前の欄が埋め尽くされると、保護者名が女性だろうと思われたのは、私を含めてもたったの2人だけだった。

たぶん他の人は皆、父親名が書かれていたのだろう。

私の他にもう1人、母親名が書かれていた子供は、通勤の時間が同じだったのか、送り迎えの時間にお会いすることが多く、日によってお母さんだったりお父さんだったり、たまにご夫婦揃っていらっしゃる時もあったので、ご両親が揃っている子だった。

ある日の出勤時、私が乗った車両の同じドアに、偶然そのお母さんが乗り込んで来て顔を合わせると、彼女が話しかけてきた。

そして、その保護者名の話を持ち出した。

「そういえば〇〇さんも保護者名のところに母親名を書いていましたよね」

「あ、はい・・・」

「そうですよね。家も保育園のことは、主に私が関わっているので主人の名前じゃなくて、私の名前にしました」

当たり前のように一方的に話す彼女に「家は私しかいないので・・・」とは言えなかった。

母子家庭はこのクラスには家しかいないのだなと思った。

程無くして新しく入園して来た子がいた。

その子もやはり保護者欄が母親名義で書かれた。

そのお母さんとは、何度か同じ時間に送り迎えするうちにお話をするようになり、その方も母子家庭ということがわかったので、とても親しくなった。

けれど、母子家庭が喜ばしい環境だった私とは違って、彼女のご主人を亡くされて余儀なく母子家庭になってしまったばかりだったので、互いの気持ちにはかなりのギャップがあったのだ。

何かの会話中に私が、母子家庭という状況に対して「・・・楽だ・・・」というような言葉を発した時「あなたは選んで母子家庭になったのかもしれないけど、私は選ばれてしまったから・・・」と、彼女に言われ、私は言葉を失ってしまった。

それは、とても衝撃だった。

海が幼稚園の時にとても仲良く遊んでいた子のお母さんと、しばらくぶりに偶然出会った。

「お元気？」

「うん！」

当時は、子供たちがいつも一緒にいたので、なるべく明るく振る舞って普通を装ってはいたが、生活が、まるで悪いことをしているかのようにびくびくした状態だった為、実情はといえば、かなり無理をして付き合っていたのだ。

そして当然、厳しい家庭の事情など一切話すことなどできなかった。

けれど今は、あの当時のような変な緊張感は何もなく、気楽に心から明るく会話ができる。

久しぶりにお会いしたということもあって、彼女もとても笑顔で接してくれていた。

そして私は、気軽に「家、離婚したの」と報告した。

すると、その瞬間彼女の顔色が一変したのだ。

一瞬にして悲愴感に満ちた顔に変わり、明らかに憐れんでいる様子が窺えた。

そして消え入るような小さな声で「大丈夫？」と言われてしまった。

その場の空気さえも、一瞬にして暗くなってしまい、こちらの方がどういう顔をしていいものか、困ってしまった。

当時、生活がどれだけ辛いかなど、その現実の中にいる時は、状況が厳しければ厳しいほど、周りの人には、とても話すことはできなかった。

自分達は、別の世界の人間なのだと思っていた。

どれだけ無理をして普通に見せかけ、自然に振舞っていたかなど、知る由もなかった彼女には、今の私の爽快感などわかるはずもなかったのだろう。

私にとっての離婚はとても前向きな選択で、幸せになれた結果だったのに、世間の目は、離婚＝悲惨(不幸)なのか。

離婚という現実を、公にはまだあまり聞くことがない時代だった。

自分はやはり世間的には特別な存在なのだ、と思い知らされていた。

## 信じられない申告

---

やつにかかわる心労がなくなったこと、そして、自分たちの為だけにお金が使えるというそんな当たり前のことがとてもありがたく、幸せを感じながら毎日を過ごしていた。

その後のやつの消息は全くわからなかったし、やつも何も接触はしてこなかった。児童手当も、悪いことをしているという意識もなく、ありがたく受けさせていただいていた。

ところが、年末になったところで、役所から連絡がきた。私が子供たちを扶養していないので、児童手当は打ち切りになる、というものだった。なぜそんなことになるのか、何が起こったのか、とても不思議に思い役所に出向いて調べてもらうことにした。

私が世帯主であることには間違いないので、とりあえず住民票を取って見た。すると、驚いたことに、なんと世帯主欄にはやつの名前が入っていて、私はやつの同居人の扱いになっていた。つまり、やつが勝手に私たちの住所に住民票を戻して世帯主になり、子供を扶養していることにしていたのだ。

平和に暮らせていると思っていたのに、またこんなことをしたのかと、とても腹が立った。その場で、係の人に住民票を提示して、やつは実際にはここに住んではいない、3人だけで暮らしているし、確かに私が子供たちを扶養している、という事実を訴え、児童手当の再開をお願いした。

すると、やつが会社の方で扶養手当を受けているので、どちらか一方でしか受けることはできないと言われてしまった。

きっとやつは有りもしない家族の申告をしたまま、会社で手当を受けていたのだ。そして年末調整の時期になり、その場をとりつくろう為に、こんなことをしたに違いなかった。（冗談じゃない、そんなの許さない）と思った。

私は家に戻ってさっそく、やつがその頃勤めていた会社の連絡先を調べ、人事の担当者に電話をした。

そしてすかさず、やつとは数か月前に離婚していて、同居もしていないし、ましてや私や子供たちさえ、やつに扶養なんてされていない。

それなのにやつが扶養手当を受けているという理由で、私が受けていた扶養手当を、対象から外されてしまった、という事実をあらいざらい話した。

会社の担当者には、逆に、ではやつの住所はどこなのか、などと聞かれてしまったが、養育費をもらっているわけではないし、連絡を取り合うことなども一切なく、全く関わりは持っていないので、それさえ知らない、ということ話をすると、とても驚かれたうえに、同情までして下さった。

そして「すぐにやつの扶養家族をはずす手続きをする」と言ってくれた。

ほどなくして、私がまた児童手当を受けられる旨の通知が届いた。

住民票も確認すると、無事やつの名前は消えて、私は世帯主に戻っていた。

やつが実際どこでどんな暮らしをしていたのか、本当に知る由もなかった。

けれど、事実関係がすべて会社に知られたことにより、当然それまで受けていた手当等も返金させられたに違いない。

その後のことももちろん、やつがどうなるうとも、もう一切関係なかった。



## Aさんから聞かされた真実

---

風も保育園を卒園する時を迎えた。

親たちは担当グループに分かれ、謝恩会の準備をすることになった。

それまでの親同士は、顔を合わせた時に挨拶をする程度の関係だったので、まともに話をするのは初めての人がほとんどだった。

Aさんが私と同じように、母子家庭だということは知っていたが、海のクラスには自分1人しかいなかった母子世帯が、他にもなんと6人もいたことが、その時になって初めてわかった。

他の方々がいつからのシングルだったのかはわからないが、皆、お互いがそうであることを知らずに卒園を迎えていた。

Aさんと私は同じグループになった。

その頃は、子ども同士も仲良しになっていたのも、この謝恩会の準備担当が縁で親同士もある程度親しくなった。

Aさんは姉御肌で、少し年が上だったので、卒園式と謝恩会の後、私たち親子を自宅に招待してくれた。

招かれたAさんのお宅は、とても豪華な家財がそろっていて、同じシングルでも質素な暮らしの我が家とは大違いだった。

さすがは元高級クラブのママという立場だった人の家だ、と思った。

私たちはお酒が進んで、かなりプライベートな部分にまで話が及んでいった。

彼女は、その時はもうすでに、ママもお店も辞めていたが、お店をやっていた当時の話を聞かせてくれた。

すると、ふいに彼女の口からやつの話が出てきた。

彼女がやつを知っていることは承知していたが、それは私だけが一方的に知っていることで、彼女には、私とやつが結びつくことはないだろう、と思っていたので、それにはいささか驚いた。

「えっ！知ってたの？」と聞くと「だって、風ちゃんそっくりじゃない。入園してきた時すぐわかったわよ」と言われた。

確かに風の顔は、やつに似ていた。

でも、他人から見てもすぐにやつの子だとわかるほど、そっくりなのか・・・

私たちは離婚後も名字を変えずにいたので、確かに、やつと私たちの名字も同じだった。

でも彼女が、私たちとやつとの関係を知っているとは、夢にも思っていなかった。

突然知らされた事実には驚くと同時に、なんだかやつにそっくりな風がかわいそうで、悔しいような悲しいような、とても困惑した気分だった。

何も知らないだろうと思っていたのに、何もかも知っていた彼女は、私たちをどんな風に見てい

たのだろう、そう思うと、急に恥ずかしくなった。

けれど話はそれどころでは終わらなかった。

今更思い出したくもなかったことだったが、私の方から「たまに送らせてもらっていたんでしょ」と、やつが運転代行をしていた時のことを、聞いてみた。

すると彼女は「〇〇さんには私の専属になってもらっていたから、毎日送ってもらっていたわよ」と、やつことは熟知していると言わんばかりに、言い聞かせてくれた。

彼女の話によると、店が終わった後は、毎日やつに自宅まで送ってもらっていたから、やつは必ず家に帰れたはずだ。

そして、子供たちの話なども聞いていたので、代行料とは別に、ちよくちよく手当なども渡していたりしたので、ずいぶん稼がせたつもりだ、というのだ。

それは、私にとってあまりにも思いがけない話で、開いた口が塞がらなくなった。

実際のやつは帰ってきたことなどほとんどなかったし、さらに、アルバイト収入はたいしたことない、と言っていたので、まるで空ごとのようだと、今更ながら呆れてしまった。

私は、やつがそんなに稼いでいたという事実を知らなかった理由に、Mという存在があったことを、恥ずかしながらもなんとなく告白した。

「なんだか・・・女の子に熱をあげてたことがあったからね。・・・きっとそっちに回していたのね」すると「そっか～・・・Mね。Mはうちの店の子でさ・・・いい子だったんだけどね。（やつと付き合うのは）辞めなって言ってたのよね。でも風ちゃんが入園してきた時、あ～やっぱり別れちゃったんだ・・・って思ったんだ～・・・」

としみじみと言われ、さらに動揺に追い打ちをかけられた。

私にとって、やつと別れた原因はMのことばかりではないが、そんなことより、彼女はすべてを知っていたのか・・・ということに、愕然としてしまった。

しかしながら、やつにはことごとく馬鹿にされていたものだ・・・と、改めてため息が出た。

## 余命半年の人

---

私たち3人だけの生活が始まって数年が経過していた。

ある日電話が掛かってきた。

受話器の向こうの女性は、落ち着いた口調で、やつはいるかということ、尋ねてきた。

（今更？）もう忘れた・・くらいの存在だったやつのことを聞かれたので、一瞬戸惑ったが、やつとはもう数年も前、とっくに別れているのでこことは関係ない。

申し訳ないけれど、今どこにいますとか、連絡先も何も知らない。

と、少しうんざりした口調で伝えた。

すると彼女は「そうですか・・・」と残念そうにゆっくりと言うと、勝手に語りだした。

実は今、自分は癌に侵されていて余命半年を宣告されている。

だから、死ぬまでの間に生前お世話になった人など、会っておきたい人を捜して、方々に連絡を取っているところで、やつもその中の一人だ、というのだった。

彼女にとってやつは、中学時代の同級生で、転校生だった彼女にとっても親切にしてくれた思い出のやさしい人だったのだそうだ。

けれど私には、やつとの思い出を語られたところで、やつの生い立ちも知らないし、家族の顔も見ることなければ、生まれた土地に行ったこともないし、想像さえもできなかったので、困惑するばかりだった。

私は彼女に、はっきりと、私とやつとの夫婦とは名ばかりで、やつのごことは何も知らないという、奇妙だった関係のすべてを話した。

すると彼女は、やつをかぼうかのように、さらに知っている限りのいろいろな話をし始めた。

「〇〇くんのお母さんは病気がちな人で、〇〇くんが小さい頃は入院していた時期が長くて家にいないことが多かったからね・・・だから〇〇くんは小さい時おばあちゃんに育てられていたんですね。母親の愛情をあまり知らずに大きくなって・・・愛情に飢えていたのかもしれないわね。男ばかりの兄弟の長男だからなおさらね。そして、高校卒業してすぐに東京に出て行っちゃったでしょ・・・〇〇くんの家は、畑の中に一軒だけ目立った3階建ての家だからあの辺の田舎じゃ結構有名な家だね・・・」

なんだか聞いているうちに、胸が苦しくなっていた。

私は本当にやつのごことを何も知らずにいたのだ。

生い立ちも初めて聞いた話だけれど、同情する感情はあまり持てなかった。

それよりなにより、家のことを聞かされたことが、とてもショックでならなかった。

私はずっと、やつは田舎の質素な家の育ちなのだろうと想像していた。

けれどそれは、あまりにも勝手な私の思い込みにすぎなかったのだ。

私は、自分自身の両親に借りていた多額のお金は、結局未だに返せないままでいた。

でも、やつの実家に借りた分は真っ先に、別れる前にすべて返済したのだ。

やつの話で驚かされることも、もううんざりだと思った。

けれどそれを最後に、やつの消息も含めて新しく知る情報は、何年経っても何ひとつとしてない

。

## あとがき

---

やつの後ろ姿を最後に見てから20年という歳月が流れました。  
お陰さまで、海も風も頼もしく育ち、普通の社会人になりました。

やつと出会ってから完全な別れまでの、わずか10年程の期間は、怒濤のように過ぎ、私自身、ありとあらゆる貴重な体験をさせていただきました。

必死に生きていたのかもしれない、けれど子供達に恵まれ、心から幸福というものを実感し、何が起きてもへこたれることなく一人で生きていける、という頑丈さを身につけることもできました。

振り返れば、それらの経験は、この上ない宝物に変わっています。

それが自分の中でだけの思い出と化して、消えてしまうには惜しいような気がして、記憶に残る全ての出来事と感情を、素人のつたない文章ですが、書き納めてみました。

やつがいなければ、やつと出会わなければ、そんな経験もできなかったのも、それは私の宿命であり、運命であったのだろうと、そういう意味ではやつに感謝しています。

完全に断たれたやつの消息を、その後も調べてみることもなく、案ずることもしてはいませんが、子供たちの中には明らかにやつの血が流れているし、今でも会話の中に普通に存在していることがあります。

やつが今、どこでどんな暮らしをしているのかわかりませんが、せめて、まともに生きてくれていれば・・・と、そう願うばかりです。

ご読了下さいまして、ありがとうございました。

橘 夢

## 私、未婚の母なんです

<http://p.booklog.jp/book/13573>

著者：橘 夢

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yume0keita/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13573>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13573>